
生徒会の事件簿・・・？

美月天音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の事件簿・・・？

【Nコード】

N7977P

【作者名】

美月天音

【あらすじ】

唯一の良心的な会計・ツツコミ役な書記・ラスボス副会長そして暴走する会長。そんなメンバーの集まる羽咲学園生徒会は今日も学園の平和を守るため（嘘）色々な難？事件にゆるゆると挑んでいく！

prologue 「何ですか、コレは」(前書き)

この物語はもちろんフィクションです。

実際の人物・団体等は一切関係ありません。

よくある設定ですが楽しんで貰えたら幸いです。

prologue 「何ですか、コレは」

はねさき
羽咲学園生徒会は容姿端麗・頭脳明晰・文武両道な生徒会長率いる超エリート集団です。常に生徒の事を第一に考え、勉強・行事・部活と何事にも全力で取り組んでいます。皆さんもぜひ羽咲学園に入学し生徒会メンバーと一緒に充実した学園生活を送りましょう。

+ + + + +

「・・・何ですか、コレは？」

私はプリンターからはき出された紙を見て思わず呟いた。

「ん・・・学校紹介用のパンフレットに載せる原稿。先生に依頼されたんだ」

「まさかコレを載せるつもりだったんですか！」

目の前にいる人物は回転イスをくるくる回して遊んでいる。

これが・・・この人が生徒会長だなんて！

回転イスで遊んでいるこの人こそ羽咲学園の生徒会長寺谷てらたにぞう想である。一言で表すと『トラブルメーカー』。いつも面倒くさい問題を片っ端から拾い集めては生徒会メンバーを困らせる。正直言って何考えているのかわからない。そんな生徒会長に振り回されるのが私、書記の藤森蘭。ふじもりらん

「じゃあ、ちよつと職員室行ってくるから」

「ちよつと待てや！」

ああ！油断していたら既に廊下に！さすがにあの嘘八百を出すわけには！

慌てて廊下に出ると遠くに見知った人の影が見えた。

「扉さーん！会長捕まえて！」

思わず声を大にして叫ぶ。そして次の瞬間――

「痛てえー！！」

会長が盛大にこけていた。その横には仁王立ちした女生徒の姿。私は急いで現場に向かう。

「ありがとうございます。扉さん」

「いいえ。おやすいご用よ」

そう言つて優雅に微笑んだその人こそ副会長星崎扉さん^{ほしざきとひら}。清楚な外見とは裏腹に格闘技をやっている。会長の暴走を止められる唯一の人物でもある。

「うわ・・・何やってるんですか・・・皆さん」

ちよつと戸惑いながら現れたのは会計の月嶋翼くん^{つきしまよく}。いつも落ち着いていて会長に見習つて欲しい人物。四月に生徒会に入つたばかり。

何だかんだで廊下に全員集合してしまった。

+ + + + +

「で、何で会長が暴走してるの？」

「実はコレを・・・」

私の手元にはパンフレット用の原稿。扉さんと翼くんはそれをのぞき込んで・・・

『何コレ。嘘八百じゃない（ですか）』

「これ載せたら詐欺ですよね・・・」

だつて現実の生徒会は・・・

誤 容姿端麗・頭脳明晰・文武両道↓ 正 ただのアホな生徒会長
誤 超エリート集団↓ 正 入ろうと思えば誰でも入れる集団
つて感じたから・・・。

「いいじゃんか。この方が生徒絶対増えるから！」

「確かにそうですけど・・・人としてダメだと思う！」

「そうよ。というかよくこんなデタラメばかり出てくるわね」

「ある意味スゴイですよ・・・」

何にしてもこのまま会長に任せておくわけにはいかない！

「もう原稿は私が書いてそれをねつ造しましょう!」

「お。マジか。じゃ頼んだ!」

「って任せっぱなしか!少しは反省してください!」

+ + + + +

後日。パンフレットは無事完成しました。

p r o l o g u e E N D

prologue 「何ですか、コレは」(後書き)

あとがきに変えてまして

次回予告

ポストに入った呪いの手紙！

盗まれる備品！

鍵の管理は大丈夫なのか！

次回、FILE 1 message for you

・すみません。8割くらい嘘です。ふざけました。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

気が向きましたらまたお付き合い下さい。

by 美月天音

FILE 1 - 1 「よし！行け！切り込み隊長！」

——ガチャリ

誰も居ない夜の校舎にドアをあける音が響く。

誰かが部屋に入った。

しばらくして、人影は何かを持って部屋からでた。

また鍵をかけ校舎の出口に。

そこに、持ってきた物を置いた。

FILE 1 message for you

+ + + + +

「・・・これは一体・・・」

5月の午後。私達生徒会は一枚の手紙とにらめっこしていた。

「俺が来たときドアの間に挟まってたんです」

第一発見者、翼くんが若干気味悪そうに言う。

「これは・・・かの有名な・・・」

会長の表情がいつになくシリアスだ！思わず

「有名な・・・？」

と聞き返してしまう。

すると会長はイスを蹴倒して

「呪いの手紙だ！」

と叫んだ。

「はあ・・・？んなわけないでしょう。誰が好きこのんで生徒会に手紙なんか・・・」

「いや、いるかもしれないわ。想の事だから誰かから恨みを買ってたって不思議じゃないもの」

「扉先輩まで・・・で、どうします。開けますか」

手紙片手に冷静に聞いてくる翼君。

「よし！いけ！切り込み隊長！」

会長の号令とともにザクツと封が開けられた。

「えーと・・・何々・・・この頃毎朝部室棟の前に部の備品が置いてあります。なんとかしてください」差出人は部活会の会長さんです」

「これは・・・お悩み依頼的な何かですか？」

「そうか！よし、サクツと依頼解決するぞ！」

「やるんですか・・・？マジですか」

意気揚々と会長は部室棟に向かっていった。こうなるともう私達に止める術は無い。

「仕方ない。いきますか」

+ + + + +

「ども。生徒会だぜー！」

「うわ。本当に来た」

「どういう意味だコラ」

部室棟に入ると入り口のすぐ目の前に沢山の人が集まっていた。

「手紙読んだわよ。どういふことなのか詳しく教えてくれるかしら？」

「あ、はい」

事の始まりは1週間前。朝、鍵を開けた部員が輪ゴムの入った箱を見つけたのが事件の始まりだった。

誰かが落としたのかとあまり気にしていなかったが、次の日卓球のラケットが落ちていたのを見つけて不審に思った。そして今日まで経過をみたが、毎日のように置いてあるのもう面倒くさくなったから生徒会に届け出た、とのこと。

「そうですか。2日目以降置いてあった物は？」

「確か・・・3日目はシューズ、4日目はものさし、5日目は水筒、6日目は記録用紙、そして今日はまた輪ゴムでした」

「なんかどうでも良い物ばかりなような・・・。そしてこの話にはまだ続きがあるようだ。」

「さらに、置いてある物は全部部室の備品なんです。夜中に誰かが部室に入ってるんじゃないかと思って・・・」

「それは・・・」

「まずくないか。防犯上の理由で。」

「そうだったのか。じゃ、ちょっと考えてみるから」

会長の一言で私達は生徒会室に撤退した。

+ + + + +

「職員室に行ってみたけれど夜学校に来た生徒は居なかったみたいよ」

生徒会室に戻り、早速捜査を始めた。でも、鍵を取りに来なかったということとは・・・

「不法侵入？それってまずくね」

「うわ・・・それって生徒じゃない確率も高いですね」
でも一体どうやって校舎に入っただろう？

「うーん・・・こういう時は情報通を呼ぶか」

そう言つて会長はケータイを操作し、電話をかける。

「誰にかけてるんですか？」

「まあすぐわかるって。・・・お。悪いけど今すぐ生徒会室に来てくれ。じゃ」

——ピッ

「ええええ！短っ。それで良いんですか！」

「オッケーオッケー」

唯一冷静な翼くんが扉さんに

「もしかして・・・新聞部ですか」

「ええ。そうよ。実は想と新聞部の部長は幼なじみのよ」

「へえ」

意外なつながりである。

そして待つこと5分。

「やつ！お待たせ」

勢いよくドアが開いて女生徒が入ってきた。

「想と扉以外は初めましてかな？私は新聞部の部長、二ノ宮鈴華このみやすかちなみに三年生！」

テンションの高い人だ。

「で、用事って何の事？」

「ああ。実は部室棟の事なんだが、部室棟で不法侵・・・いや、鍵を使わずに入れる場所があるか知ってるか？」

言い直したけど意味は同じだ！そして・・・

「なんつーことを聞いてるんですか！」

「まあまあ」

鈴華さんは少し考えた後・・・

「あるよ。一応」

「あるんかい！」

おもわず会長以外の全員がツツコミを入れた。マズイだろ・・・それ。

「部室棟の一階に空き部屋があるんだけど、その窓の鍵が壊れていてとも簡単に侵入できるよ。主に忘れ物をした生徒が使っているけど」

「そうか。よし、用事はそれだけだ。帰って良し！」

「はいはい。またね」

そう言っただけで鈴華さんは帰って行った。

「・・・これで一応犯人の使ったルートは掴めたわね・・・」

「鍵はあとで職員室に報告しておきます・・・」

何だかすごく疲れた気がする・・・。

+ + + + +

そして依頼を受けてから3日が経った。

「今日はまたシューズか・・・」

未だに事件の真相は掴めない。

「一体誰が何の目的でこんなことを・・・。別に得することもないですし」

生徒会室に重苦しい空気が流れる・・・。

——そんな空気を打ち破ったのはノックの音だった。

「・・・誰か来たようね」

ドアの近くにいた翼君が様子を見に行く・・・。

そして暫くして翼君はサッカー部らしき男子生徒を連れて中に入ってきた。

「えー・・・あの事件に関して何かあるみたいなんですけど」

「お？そうか。君、名前は？」

男子生徒は江東^{えとう}と名乗った。そして江東くんは私達に衝撃の事実を告げる・・・。

FILE 1 - 2 「そのぬいぐるみは私物よね？」（前書き）

- 1の続きです。前を読まないと話が繋がりません。

FILE 1 - 2 「そのぬいぐるみは私物よね？」

「それは・・・本当か？」

少年——江東えとうの言ったことは私達生徒会を本当に驚かせた。

事件の起きる前日、江東はサッカー部の女子マネージャーに告白した。

「好きです！付き合ってください！」

それはもうストレートに。女子マネージャーは少し驚いた後、

「今ここでは答えない。でも、明日から起きることが私の答えよ」

そう言っただけでさっさと歩いていった。

そして翌日、輪ゴムの箱が落ちていた。

「俺はこの事件が彼女のメッセージじゃないかと思うんです」

確かに、そう考えれば色々納得がいくような・・・いかないうような。

「すげーマネージャーだなあ。おい」

会長はゲラゲラと笑った。でも、次の瞬間真顔に戻り・・・

「で、俺たちにそのメッセージの解釈をして欲しいと」

「はい。自分でも色々考えてみたんですけど・・・」

「よし。その依頼受けた！任せとけ」

また後先考えずに・・・まあ、今回は良いけど。

江東くんは何度もお礼を言いながら帰って行った。

+ + + + +

その翌日。状況が変わった。

「今朝、部室棟の入り口に頭の取れたクマのぬいぐるみが落ちていました」

翼よくくんの冷静な報告が生徒会室に響く。

「え・・・と・・・そのぬいぐるみは私物よね？」
いきなり猟奇的になった落とし物にさすがの扉さんとびも啞然としてい
る。

「はい。おそらくその女子マネージャーのかと」

「おいおい。そのマネージャー大丈夫か・・・？」

なんで突然ぬいぐるみなんか。しかも頭の取れたのなんて・・・。
ん？

「頭・・・？」

何かが引つかかる。これは・・・重要なヒントかもしれない！

「どうかしましたか？ 蘭先輩？」

「待つて！あと少しでわかる気がする・・・！」

頭が取れたぬいぐるみ・・・同じ物が繰り返し置かれている・・・
メッセージ・・・

「お。そういうことか。俺わかったわ」

「え、想そうに先を越されるなんて・・・落ちぶれたものね。私も」

「どういう意味だコラ」

「同感です。扉先輩」

「だからどういう・・・」「わかったー！」

推理小説っぽく言えば「全ての謎は解けた」的な感じだ。

「・・・たたくひとのセリフを遮るな！よし。江東を呼ぶぞ」

携帯電話を操作し江東くんくんに電話をかける。

そして、待つこと5分。生徒会室のドアが開いた。

+ + + + +

会長がゆつくりと口を開いた。

「この事件の鍵は昨日落ちていた『頭の取れたぬいぐるみ』にある。

つまり、『頭』を取ればいいんだ」

『は？』

いきなりすぎる。恐らく通じてないので口を挟んでみることにした。

「えーと・・・例えば『ノート』の頭は『の』、『生徒会』の頭は『せ』そして『会長』の頭は『バカ』・・・」

「お前ふざけてんのか。コラ」

はい。ふざけました。全力で。

「・・・今のは冗談として、前の二つ・・・わかりましたか？」

少し間があいて・・・

「なるほど。そういうことでしたか」

「よくわかったわ」

扉さんと翼くんは気がついたようだ。

「しょうがねえなあ。俺が解説してやるぜ」

なんでそんなに偉そうなんだ。あんたは。

「『頭』っていうのは単語を平仮名にした時の最初の文字の事を指している。そして置いてあった物の『頭』を取って繋がればメッセーじになるわけだ」

ここで一呼吸。そして何故か一気に

「つまり輪ゴムの箱の頭は『わ』、卓球のラケットの頭は『た』、シューズ・・・は・・・『し』、物・・・差し・・・は・・・『も』・・・」

言い切った。最後の方滅茶苦茶苦しそうだったけど。しょうがないので後を引き継ぐ。

「水筒は『す』、記録用紙は『き』・・・これを繋げると・・・」

「わたしも すき」

+ + + + +

「よかったですね！おめでとうございます」

後日、生徒会室に江東くんとその彼女がやってきた。

「おーおー。面倒くさいカップルが来た」

「そういうこと言わないの、想。でも彼女さんちょっとやり過ぎよ」

「そうですね・・・いくら何でも不法侵入は。まあ。今度から気を

つけてくださいね」

・・今度とかあるのか・・？翼くんの発言に首をかしげる。

二人は何度もお礼を言って生徒会室を出て行った。・・・すっかり手を繋ぎ合って。

「よし！依頼解決だな！」

二人の背中が見えなくなるまで私達は廊下を眺めていた。

「さて、私達も帰りましょう」

外からは運動部の声が聞こえる。

窓から見えるのはいつもと同じ平和な風景だった。

FILE 1 message for you . . .
END

FILE 1 - 2 「そのぬいぐるみは私物よね？」（後書き）

後書きに変えまして・・

次話予告

テスト・・それは学生の敵。

蒸し暑くなってきた時、ついにテストがやってくる！

次回 interval あみだくじは大切だと思う（仮）

・・またふざけました。すみません。

ここまで読んでくださって本当に有り難うございました。

よくある設定、よくあるストーリーで「どうなんだ」って感じですが、よろしかったら続きも是非ご覧下さい。

Interval あみだくじは大切だと思う。

——ここは教室という名のバトルフィールド。

私は強大な敵と対峙していた。残り時間はあと5分。私は最後の力を振り絞り、技を繰り出す！

「必殺！二次関数！」

——決まった……！

そう思った……。しかし！

「ふっ……甘いな」

それは鼻で笑われ、あっさりはじき返された。

もう技は出し切った……。時間も無い！

（どうする……。私！？）

——キンコンカンコン♪

「はい。終了。後ろから集めてこい」

私は燃え尽きた……。

+ + + + +

「はあ……。疲れた……」

テストも終わり、私は生徒会室に続く廊下を歩いていた。

「……。最後の数学が……。あと少しあればわかった……。ハズがないな」

出来はまずまず。いつも通りな気がする。

「あれ、もう誰か来てる」

ドアを開けて中を覗くと誰も居ない。

「おかしいな……。ん？」

中に入ろうとして物を踏んだ感触がした。視線を下げると……

「なにやってるんですか！あんたは」

会長を踏んでいた。

「・・・おゝ蘭^{らん}か。俺は見ての通りだらけてる」
「だらけるにしても何で床に寝てるんですか?・・・まあとにかくイスに座りましょう」

+ + + + +

お茶を用意して会長の前に置く。会長は相変わらずだらけている。
「テストどうでしたか?」
話題を振ってみた。

「ん・・・まずまずだ。いつもと同じだ」
「そうですね・・・そういえば会長っていつも順位どのくらいなんですか?」

「・・・真ん中より下。時々上だ」
私と同じくらいだ。もう一つ質問してみよう。

「じゃあ、誰が一位なんですか」
「あいつしかいないだろう・・・。扉^{とび}だ」

確かに一位取ってそんな人だなあ。でもそうすると・・・
「なんで扉先輩が生徒会長にならなかったんですか?」
「それは、俺の類い希なる美貌と才能を評価されたからだ!」
・・・

「言ってて虚しくありませんか?」
「おう・・・。せめてつつこめよ。そういえばお前4択問題でわからない時どうしてる?」

「唐突ですね。8割勘で2割空白ですけど・・・」
そう答えると会長は真剣な顔になって
「良いこと教えてやろうか」

(これは・・・もしかして何か良い方法が・・・!?)
会長は息を吸うと

「あみだくじって大切だと思わないか?」
・・・

「・・・期待した私がアホでした」

あみだくじって・・・！面倒じゃないか？逆に。

「それはともかく扉と翼はどこだ？」

勝手に完結させないで欲しい。筆箱を出そうとカバンの中を見ながら私は答える。

「ホームルームでも伸びてるんじゃないですか？」

あ。これ今日までに提出しないといけないプリントだ。

「会長、ちよつと私職員室行つて来ます」

「お。事故るなよ」

「学園内でどうやって事故るんですか」

+ + + + +

「失礼します」

職員室に入つて真つ直ぐ担任の席に向かう。既にテストの採点が始まつているようでペンの音が良く聞こえた。

「これ・・・。ああ、寺谷の答案か」

隣の机からあきれた声が聞こえる。

「またですか・・・うわつ。何ですかこのあみだくじ」

「いつもこうなんだよ・・・選択問題は必ずあみだくじを書いてやがる」

寺谷つて間違いなく会長だよな・・・。本当にやってたのか！

呆然としていると他の先生が割り込んでくる。

「寺谷つて入試の時、星崎ほしざきを抜いて一位だった気がするんですけど・

・

何い！？あの会長が一位！？

「噂じゃフランス語と中国語と韓国語とイタリア語が話せるみたいですよ」

「おいおい・・・入学までの間にあいつに何があつたんだよ」

・・・衝撃の事実だ。別人じゃないかとも思つてしまう。

先生達は会長の話題で盛り上がりだして教頭先生に注意されていた。

「・・・失礼しました」

+ + + + +

「空？。甚至？？」（暇だ。本でも読むか）

ふじもりらん
藤森蘭が
出て行つた後の生徒会室。寺谷想は中国語でそう呟いて

——ドン

かなりの厚さのある本をカバンから取り出し読みはじめた。
そのタイトルは「Lotttery」（くじ引き）。

I n t e r v a l あみだくじは大切だと思う。 E N D

I n t e r v a l あみだくじは大切だと思う。(後書き)

後書きに変えまして

次話予告

バルコニーに残された謎の足跡

割られた窓ガラス

そして黒い影・・・

次回 F I L E 2 てるてる坊主殺傷事件

どんな話にするつもりだ・・・。

本当にそんな内容になるのか？

よろしければ次もご覧下さい。

FILE 2 「落ち込まないでください」

校舎内は静まりかえっていた

生徒会室のバルコニーに何者かが現れる

何かが光を放つ

そして何かが裂ける音がした

FILE 2 てるてる坊主殺傷事件

+ + + + +

「あああああああああああ！」

私が生徒会室のドアを開けると会長の叫び声が聞こえてきた。

「何やってるんですか」

叫んでいる会長に代わり、^{とろろ}扉さんに聞いてみる。

「これを見て」

指さされた先はバルコニー。会長の席の後ろにある眺めの良い場所だ。

「あゝ・・・悲惨ですね。これは」

連日の雨で少し濡れた床には泥であろう汚れ。そして泥で汚れた物体が3つと破れた布が落ちていた。

「どうしたんですか？」

いつのまにか翼くんが来ていた。会長とバルコニーを見やり大体のことを察したようだ。

「これは先週作ったてるてる坊主・・・ですよね？」

先週、この地域も梅雨入りし、連日雨が続けていた。おかげで生徒達のテンションは下がる一方。そんなテンションに耐えきれなく

なつた会長が

「天氣が悪いんだ！よし。てるてる坊主でも作るぞ！」

と、宣言したことによりバルコニーには4体のてるてる坊主が並んだ。

「・・・どのどいつだ。俺の力作を滅茶苦茶にした奴は！」

そこか。確かに会長のだけタダの布の塊になってたけど。

「よし！この『てるてる坊主殺傷事件』の犯人捜しだ！どうせ仕事無いよな」

「あるわよ。来週の集会の計画、学園祭の準備、それに学校見学会の企画・・・」

山積みじゃないか。

「っ・・・聞き込みだ！」

「開き直ったわね」

+ + + + +

「と言っても・・・何を聞き込むんですか？今日は月曜日。事件は休日に起こったんですよ。見てた人いるんですかね・・・？」

もつともな意見を翼くんが出した。

「いや、部活とかで来てた生徒もいたはずだ。そいつらに聞いてみよう」

とりあえず部室棟に行ってみよう。

連日の雨のせいか意外と部室棟には人が残っていた。

「お、会長じゃん。何やってんだ？」

「サボリか？」

「違えよ！他もいるだろうが！じゃなくてお前等この休み中に部活あったか？」

「土曜日にあったぞ。それがどうした」

「じゃあその日生徒会室に人影があったかわかるか？」

「いやいや・知らないから。見えないし」

「第一、生徒会室の鍵は職員室にあるんだろ？借りれるはずないじゃん」

土曜日は違うのか・・・？

「いや、壁を伝ってバルコニーに登ってきたとかあるかもしれん」

「いや、無いから。絶対」

会長はちよつと雑談を交わして次の生徒の元へ行つた。

そして数分後・・・

沈んだ顔の会長が戻ってきた。

「どういうことだ・・・誰も知らねえって」

全員同じ結果らしく行き詰まってしまった。

「あのとるてる坊主に何か手がかりが無いですかね・・・」

翼君の言葉を受けて扉さんがポケットからてるてる坊主の残骸を取り出した。

「相変わらず無惨な姿だな・・・俺のとるてる坊主」

「落ち込まないでください」

残骸を見て翼君は何かを発見したみたいだ。

「何か破れ方が妙ですね・・・狙った感じというか・・・無作為で感じはしません」

確かに首の一部の布が破けているだけだ。ちよつと首が取れかけで悲しい。

「ここに何かつけてましたか？」

「ん・・確か扉にもらったちよつと大きめのビーズを着けてたような」

思い出した。「派手にしようぜ！」と言って扉さんが差し出したビーズを器用に縫いつけていた。意外と裁縫が上手だと翼君と二人で驚いた。

「じゃあ犯人はそのビーズを狙ったのかしら？」

「そうなりますよね・・・」

どんなビーズだったかな・・・思い出せない。そんな私の心を見

透かしたかのように扉さんが

「ビーズならまだあるわよ」

そう言つてポケットから・・・

『うわっ』

取り出した。なんだコレ・・・！？眩しいぞ！

しばらく驚いていた私と会長と翼君。一番早く立ち直ったのは翼君だった。

「先輩・・・これ本当にビーズですか・・・すごく眩しいんですけど・・・」

「よく光を反射するって有名なのよコレ。すごい威力ね」

「じゃあ何だ・・・犯人はコレを宝石とでも勘違いしたってのか？」

それは無い。近くで見ればただのビーズだ。

「それならこのビーズが欲しかったのかしら」

「普通のビーズですよ。それにどうやって侵入したかも問題ですね」

・・・また行き詰まってしまった。

+ + + + +

そして2日が経った。有力な手がかりは見つからないままだ。今日も部室棟の周りで調査を行っていた。

「あ」

翼君が何かを指さした。見てみるとガラスの破片が落ちていた。

「危ねえな。怪我でもしたらどうするんだ」

会長が近づくと目の前を黒い影が横切った。

「・・・カラス？」

カラスはガラスの上をうろうろした後、一つ破片を持って飛んでいった。

「そついえばカラスって光り物好きよね」

扉さんが言つた・・・ん？

あれ・・・何か引つかかる・・・。

「お、俺お前の考えてることわかったぜ」

会長の言葉も右から左に抜けていく。

カラスと光り物とビーズ・・・・・・・・。

「扉さん、あのビーズ一個貰って良いですか？」

「良いけど・・・はい」

私はビーズを持ってカラスの集まる方に行った。

「何してるんですか・・・ああ」

翼君も気がついたようだ。

カラスの目の前にビーズを置く。

——キラーン

そんな音が聞こえた気がした。

カラスは勢いよくビーズを取ると飛んでいった。

「これでわかりました。犯人はカラスですね」

「ああ・・・やっぱそうなるのか。確かにアレカラスが好きそうだもんな」

光に反射した輝くビーズ・・・光り物をカラスが見逃すはずがない。泥はきつと足跡。布はビーズを取るときに裂けたのであろう。

「カラスを殴るわけにいかねえな・・・帰るか」

会長はとぼとぼ歩いていった。

その後暫く、カラスを見ると会長の機嫌が悪くなった。

FILE 2 END

FILE 2 「落ち込まないでください」(後書き)

後書きに変えまして

次話予告

そうだ、合宿をしよう。

音楽室の幽霊

夜に響くピアノの音

その正体は・・・!?

FILE 3 学校の怪談(仮)

FILE 3 - 1 「我が生徒会は20分前行動が原則だ！」

夜の校舎にピアノの音が響く

しかし旋律はたどたどしく、3音に一回は止まる

――ガタン

ピアノの蓋の閉じる音がする

FILE 3 学校の怪談

+ + + + + + +

夏休み初日。私は制服を着て学校に着ていた。手にはボストンバツク。

(どうしてこんなことに・・・)

きっかけは終業式の前日の会長の発言だった。

『そうだ。合宿をしよう』

『何京都に行こうのノリで言ってるんですか』

『そんな訳だから初日から3日ほどやるからよろしく！』

『スルーですか！』

扉^{とびら}さんと翼^{よく}くんが視線で『諦める』と言っていたのが妙に印象に残っている。

そんなこんなで生徒会室のドアを開けると他のメンバーは既にそろっていた。

「遅いぞ！蘭^{らん}！」

「まだ10分前じゃないですか」

「我が生徒会は20分前行動が原則だ！」

「知りません。そんなもの」

今思いついただろ。

「ところで、なんで突然合宿なんてやるんですか？」

翼君が聞いた。扉さんも

「そうね。一応仕事は休み前に終わったはずよ」

「ふっふっふ・・・それはだな・・・」

会長は背後から何かを取り出し

——バン！

机に置いた。

「生徒が居るとできない仕事を片付けるためだ！」

机に置かれた物は『意見箱』。生徒会室前に置いてある生徒たちの悩みや要望が沢山つまった何とも面倒くさい箱だ。

「でも大抵の依頼って『部活の予算増やせ』とか『授業日数減らせ』とかどうしようも無い物じゃない。何があつたの？」

「これだ！」

一枚の紙が机の上に現れた。

「何々・・・夜中に第二校舎からピアノの音が聞こえます？」

「こつちも幽霊が出るって内容ですよ」

他にも何枚か同じ内容の紙があつた。・・・ふと嫌な予感がした。

「まさか・・・会長」

「そうだ！この合宿ではこの依頼を解決するぞ！」
やっぱりそうか！

+ + + + + + +

そんなこんなで私達は第二校舎にやって来た。

「何で昼間に来る必要が・・・」

「下調べだよ。下調べ。本格的にやるのは夜からだ！」

音楽室のある二階に向かう。少し老朽化した階段がきしんで音を立てる。

「昼なのになんで微妙に暗いのかなあ・・・」

「窓無いものね」

音楽室は当たり前前だけど誰も居なかった。何かが使われた形跡もな

い。

「本当に幽霊なんているんですか」
その時

——ガタンッ

『!？』

大きな音がした。おそらく下の階からだろう。

「・・・行くぞ」

階段を下りて廊下を見渡す。しかし人影も物の落ちた形跡もなかった。

「これって・・・」

思わず言ってしまう。

「本格的に幽霊な感じですか・・・？」

疑問を抱いたまま私達は生徒会室に戻った。

「そういえば第二校舎ってどんな教室がありましたっけ・・・？」
翼くんがふと思い出したらしく尋ねた。

「ええと・・・確か音楽室、理科室、美術室、調理室、情報機器室・
・・・って感じかしら」

扉さんが答えたがいまいち自信がなさそうだ。

「何でお前等覚えてないんだよ。翼はともかく扉は3年目だよ」

「無駄に広いからよ。この学校。私は基本第三校舎を使うし」

この学園には中等部校舎が3つ、高等部校舎が3つそして中央に職員室やら玄関やらがある校舎と体育館が2つばかりあって広すぎる。学園の隅から隅まで15分はかかるであろう。

「他の教室には異変は無かったですよね」

そのとき扉さんが

「そのピアノなんだけどね・・・」

そう言っ言葉切る。

((これは・・・何か重要な手がかりかも・・・!？))
「ものすごく下手、らしいのよ」

「……え。それだけ？」
「期待したのに……」
誰かが呟いた。

+ + + + +

夜になった。少し早めに夕食をすませた私達は第二校舎に向かった。

「……やっぱ気味悪いですね……夜の学校って」

「なんだ？怖いのか？……（小声で）似合わねえ」

「聞こえてますよ……というかどういう意味ですか！？」

私も一応女子だ！

「二人とも、静かにしてください」

翼君に怒られ、私達は静かに階段を上った。その時

（

「これは……ピアノの音」

極力静かに階段を駆け上がる。音はさっきよりもハッキリ聞こえた。

……が……

「これは……」

私の言いかけた言葉を会長が引き継ぐ。

「スゲー下手だな」

私はそんなに音楽が出来るわけでは無いが……これは下手だ。音は途中でよく止まるし、音は間違えている。

「これ……本当に幽霊？」

「とりあえず中を見てみるぞ」

会長がそう言った直後……

——バン！

ピアノの蓋の閉まる音がした。翼君が勢いよく扉を開ける！

「……あ……れ？」

中には……誰もいなかった。もちろんピアノの音も聞こえない。

今夜の調査はこれで打ち切りとなった。

「おゝ・・・眠そうだな」

翌朝、職員室に行くと宿直の先生（33歳独身、音楽教師）にそう言われた。

「いやゝ・・・ちょっと色々ありました」

「何だか知らんが若いってのはいいなあ」

「・・・はあ・・・」

言うだけ言つと先生はピアノ譜らしき物に目を戻した。

「先生弾くんですか？」

「いや俺じゃない。何しろ二ノ宮^{にのみや}がピアノをやるって言い出したから」

「二ノ宮・・・って鈴華さん^{すずか}ですか？そえばブラスバンド部にも所属してましたよね」

二ノ宮鈴華さんは会長の幼なじみで学園の事なら何でも知ってる通称「情報屋」。報道部所属だが楽器もできるらしくブラスバンド部も掛け持ちしていると前に言っていた。

「意外だなあ。鈴華さんがピアノ弾けないなんて」

「よっぽど下手らしいぞ。本人が言っていた・・・で用事はなんだ？」

そつえば用事があつてきたんだ。

「ええと・・・」

用件をすませ私は生徒会室に戻った。・・・何かを掴んだ気がした。

FILE 3 - 2 「大丈夫だ。問題ない」 (前書き)

続きます。前を読むと話が繋がります。

FILE 3 - 2 「大丈夫だ。問題ない」

職員室を出て、私は生徒会室へ向かった。ただし考え事をしながら。

（昨日のピアノ・・・初心者みたいだったな。それにしても鈴華さんにも出来ない物があるなんて・・・って人だから当たり前だ（ど）

とかブツブツ言いながら歩いていると

「うおっ！」

「きゃっ！」

人とぶつかってしまった。といつても

「会長じゃないですか。何やってるんですか」

「遅いから見に来たんだ」

それはどうも。心配してたのか・・・一応。

「そつえば会長、鈴華さんってピアノ弾けないんですか？」

確認のため幼なじみさんに聞いてみる。

「そついや見たこと無いな。他の楽器はマジ上手いにな」

・・・これで確定した。

会長の先を行きながらポツリと

「わかりましたよ。幽霊の正体」

言ってみたら会長はニヤリと笑って

「俺も知ってる」

と言った。

また先を越された・・・！？

+ + + + + + +

そして夜。再び第二校舎にやってきた。
階段を上り、音楽室のドアの前で止まる。

「今日はいるかしらね・・・幽霊」

扉さんが呟いた。

「いますよ。絶対」

自信があるので私はそう答えてみた。

「？先輩わかつたんですか」

翼君が聞いてくる。私の代わりに会長が

「俺もわかつたぜ。というわけで」

そう答えポケットから取り出したのは・・・

「ケータイ？」

「そして・・・これでよし」

ケータイを操作して会長は電話を始めた。

「いいんですか？こんなコトして」

思わず私は聞いてしまった。しかし会長は

「大丈夫だ。問題ない」

と某セリフを言った。何秒かして

——ピピピ　ピピピ

着信音が聞こえた。もちろん私達じゃない。

「音楽室の中から・・・？」

翼君が呟いてドアに手を伸ばし・・・開けた。

「え」

中にいた人・・・つまり鈴華さんはケータイを持ってこっちを向いた。

「あれ、鈴華さんじゃない・・・どうして・・・？」

「あ・・・そういうことですか。意外ですね」

翼君は気がついたようだった。

「ということで幽霊の正体は鈴華だ」

鈴華さんは衝撃から立ち直ったようで

「なんでココにいるのさ！？というか生徒会全員集合してるじゃん！」

顔を真っ赤にして叫んだ。

「お前知らないのかよ。『音楽室からピアノの音が』とか『幽霊がいる』とか結構噂になってんぞ」

「ああ・・・意見箱に入ってたんだね・・・私としたことがぬかつたな・・・」

私はふと思いついたことを聞いてみる。

「なんで真夜中にしかも学校で練習してるんですか？」

「いや・・・実は我が家にピアノという物が無くて・・・今度ブラバンの方でピアノをやらなきゃなんだけどぶっちゃけ練習時間が足りない訳よ。コレが」

動機はわかったけど・・・別に夜中にわざわざ忍び込まなくても・・・。半分犯罪だぞ。これ。

「この学校のセキユリティーは大丈夫なのかしら・・・」

「まあ、とにかく今度からは絶対にやらないでくださいよ」

「はゝい。ごめんね」

+ + + + +

その後、幽霊の噂は自然消滅し、朝・昼・放課後とピアノの音が絶え間なく聞こえるようになった。

ある生徒はこう言った

「・・・しかし・・・下手だよな。このピアノ」

「もう2ヶ月にもなるけど一行に上達しねえ」

・・・どうやら鈴華さんはピアノが苦手らしい。

FILE 3 END

FILE 3 - 2 「大丈夫だ。問題ない」(後書き)

後書きに変えまして

次話予告

にんじん

たまねぎ

そして肉

次回、Interval しばらく煮込みます(仮

そういえば今更ですが、キャラ名のルビが間違っていました。訂正しましたが・・・自分で読み方忘れていたかどうかなんだろう・・・とか思いましたw
読んでくれている方本当にいるのかな。とか思いながら書いてます。よろしければもう少しお付き合いください。

Interval しばらく煮込みます

合宿というからには、もちろん宿泊もあるわけだ。

合宿二日目の夕方、私は翼くんと二人で調理室にやってきた。

「夕食当番か・・・何作る？」

「ここにある材料で出来るのは・・・」

夕食を作ることになった私達は段ボールに入った材料を見た。

「にんじん、じゃがいも、タマネギ・・・これはカレーしか無いですね」

「あ、カレールーも入ってるよ。じゃあ決定だね」

そんなわけでカレー作り、開始します！

+ + + + +

とりあえず私はお米をとぐ。その間に翼くんが野菜と肉を切ってくれるみたいだ。

「どのくらいあれば良いかな・・・5合？」

「そんなわけないでしょう。適当に見て下さい」

じゃあ3合くらいでいいや。余ったら明日食べればいいし。

炊飯器にお米をセットし、野菜を切ろうと調理台に戻る・・・が・・・

——ストトトトト

「翼君・・・」

包丁がスゴイ勢いで動いていた。速い速い。

「野菜終わりましたよ・・・ってどうかしましたか？」

「いや・・・翼君って料理得意だったりする？」

「まあ・・・一応。よくやりますよ」

へえ・・・意外だ。

「確かに器用だもんね・・・会長とは大違いだ」

「ああ・・・昨日のは凄かったですね」

昨日の夕食当番は会長と扉さんだった。メニューは焼きそば。

会長が皿を持って生徒会室に入ってきた。

『できたぜー！心して食べよ』

『・・・なんか・・・ごめんね』

扉さんが謝りながら入ってきたのが気になったが空腹だったので早速食べることにした。

『いただきまー・・・す・・・』

皿を見ると・・・謎の物体が入っていた。

『・・・これは・・・なんですか』

『焼きそばだが・・・それがどうした？』

嘘だろ！？ソース焼きそばがめんつゆの中に沈んでいるモノのどこが焼きそばだ！ご丁寧に海苔までついてるし・・・。

『普通のモノじゃつまらないから俺特製、【ソバはソバでも焼きそば】にしてみた』

何だそのネーミング。というか普通のでいいから！

『あはは・・・気がついたら暴走してたの・・・はい、サラダもどろぞ』

苦笑いして普通のサラダを出してくれた扉さんだった・・・。

「あれは衝撃的だった。しかもマズイ」

野菜を鍋に入れながら昨日のことを思い出す。

「扉先輩は料理上手かったですけどね・・・それが救いでした」
扉さん作のサラダは普通においしかった。

「会長は結構器用だけど・・・バカなんだよ」

「うわ・・・サラッとひどいことを」

ある意味天才な部分もあるけれど

「えーと・・・これでしたら煮込みます、と」

いつのまにかルーが入れられていて完成間近となっていた。

「あー・・・お腹空いたな・・・」

+ + + + +

——しばらくしまして・・・

「できましたよー。おかわり自由ですよー」

鍋をもって生徒会室に入る。会長は既にスタンバイしていた。

「おお！やっとできたか。メニューは？」

「カレーですけど」

答えるより早く会長はカレーを食べ始めていた。

「んゝ・・・うまい！」

それはよかった。

「だけど・・・何か足りない気がする・・・」

会長は何かを考え始めた。

「先輩、俺嫌な予感がするんですけど・・・」

翼くんがボソツと呟いた・・・私もだ。

「俺ならこの上にわさびかけるぞ」

・・・はあ？

「「何で!？」」

どうしてそうなった・・・。

会長のことがわからなくなる合宿の一夜だった・・・。

I n t e r v a l E N D

Interval しばらく煮込みます（後書き）

後書きに変えまして

次話予告

倉庫に隠された学園のお宝！？

鍵は謎の金庫にあり！？

次回、FILE 4 Treasure & Number
（仮）

ちなみに・・・今回出てきたカレーのレシピは適当ですのであしからずww

ついでに、私は【ソバはソバでも焼きそば】は食べたこと無いです。
不味そうだなあ・・・ww

FILE 4「何って・・・『必殺 俺キック』」

今から数年前、生徒会室には四人の影があった。

「ねえ、ねえ、何入れる？」

「うん・・・普通じゃ面白くないよな」

4人は談笑しながら金庫を取り囲んでいた。

「よし、これを入れよう」

一人の意見に他の三人は賛成し、金庫の鍵が閉められる。

FILE 4 Treasure & Number

+ + + + +

合宿3日目。合宿も残すところあと1日だけとなった。

私達は生徒会室の隣にある倉庫の片付けをしていた。

「終わんねーな。だいたい、どうしてこんなに物が多いんだ！」

生徒会室は段ボールやその他色々な物でいっぱいだ。この他にまだたくさんあるから驚きである。

「次の箱、取ってきますね」

私はそう宣言をして倉庫に向かう。そして中に入り、ドアを閉めた。

——カチャッ

「・・・今なんかヤバイ音がしたような・・・」

試しにドアノブを回し、ドアを開けようとするが・・・

「開かない・・・」

どうということだ！

「ちよつと！誰か鍵閉めましたかー？」

外に向かって声を張り上げる。

「そんなことしてねーよ！何だ、ドア開かないのかー？」

会長から返事があつて、外からドアを開けようとする音がする。

「くそっ……開かねえ」

努力虚しく、ドアはびくともしない。

「ちよっと待つて、鍵とつてくるわ」

扉さんがそう言つて走り出す……足音が聞こえる。

「いや、その必要は無い！」

会長が叫んだ。

「何ですかー！必要でしょー」

外に向かつて叫ぶとだんだん会長が離れていく気配がした。

「そーれーはー」

大声で叫ぶ。そして次の瞬間

——バーン！

スゴイ音と共に室内に光が差し込んだ。

よく見ると……ドアが破壊されている。

「ちよつと……！あんた何したんですか！？」

思わずあんた呼びになったが気にしたら負けだ。会長を見ると

「何って……『必殺 俺キック』」

爽やかな笑顔で答えてくれた。ドア壊しただけだろうが。

「……ああ……修理費が」

翼くんが外で無言で肩を落としていた。修理以前の問題だろう。コ
シ。

+ + + + +

とりあえずドアはそのままにして、改めて倉庫の中を見る。

「色々入ってますね……」

翼くんがしみじみと呟く。

倉庫にはファイルの入った棚、賞状、なにがあつたのかわからない
けど鯉のぼり他様々な物が転がっていた。

「ん……これは何だ？」

会長が足下を見やる。そこには黒い箱が転がっていた。

「これは金庫ね。何か張り紙がしてあるわ」

私は金庫に貼られた紙を取り、読み上げた。

「えーと・・・『未来の生徒会役員諸君へ。この金庫には学園の宝が隠されています。鍵は過去の栄光にあり。探してみてね』だそうです」

何というか・・・怪しくないか？だが会長は・・・

「おもしろいじゃねーか！やってみようぜ！」

早速倉庫の中に入っていた。やっぱりそうなるのか。

「過去の栄光か・・・とりあえず倉庫の中を調べてみましょう」
扉さんの号令で私達は倉庫の中に散らばった。

——そしてしばらくして

翼くんが見つけた。

「このファイルには部活動の記録が載っていますよ。見ますか？」

私は渡されたファイルを見て

「へえ・・・昔はすごかったんだな・・・。全国出場！？ありえない」

今じゃ考えられない記録ばかりだ。ボーツと見ていると会長が

「ん？これ・・・何だ？」

ファイルの背表紙を指さした。そこには【10】と書かれていた。

「鍵かもしれないわね・・・メモしておくわ」

またしばらくして

「お、これは賞状か。どうして飾ってないんだ？」

会長が抱えてきたのは額縁に入った賞状だった。

「えーと・・・『羽咲地区だるまさんが転んだ大会優勝』！？どんな大会だよ！」

何でそんな物に出てるんだ生徒会！謎だ・・・と思ったところで見つけた。

「あ、また何か書かれていますね・・・【12】？」

翼くんが読み上げたところに扉さんがやって来て、

「トロフィーの台座の下にも書かれていたわ・・・【15】。あとメ

「モモ」

そう言つて手に持っていたメモを会長に手渡す。

「何々・・・並べて【イシ】をぬかして無い番号が鍵・・・？」

は？取りあえず紙に数字を並べてみよう・・・。

自然と手は小さい順に数字を書いている。

「無い番号つて・・・11・11・13・14・・・の事ですよね」

翼くんが呟く。【イシ】をぬかすつて・・・どうということ・・・？

イシ・・・

いし・・・

い・・・し・・・！？

何かがひつかかった。

会長を見ると彼はニヤリと笑つて言った。

「わかつたぜ。番号は11113だ」

何で・・・！？他のメンバーも驚いた顔をしている。今回は会長しかわからなかつたようだった。

「かいせーつ。ヒントは【イシ】をぬかす、にある。扉」

会長は扉さんを指さした。

「14つて・・・【イシ】だよな？」

扉さんは一瞬混乱したようだがすぐに気がついて

「そうね・・・ああ。そういうことなのね」

14が【イシ】^{イシ}・・・・・・あ。

14

つて・・・

「無理がないですか・・・？」

「そこは気にしたら負けだ。さて、金庫をあけるぜ！」

ダイヤルを慎重に回し・・・

カチャ

「開いた！」

一体どんなお宝が・・・・・・え・・・。

目に飛び込んできたのはダルマ。

「え・・・何でダルマ・・・」

「手紙が入ってるわ・・・このダルマで必勝祈願をしてください・・・何を」

「というかこれは・・・お宝か？」

「何か・・・激しく無駄な努力をした気がするんだが・・・」

会長はそう呟くと肩を落とした。

その後、ダルマは生徒会室の守り神（？）として会長の横に陣取ることとなった。

FILE 4 E N D

FILE 4「何って・・・『必殺 俺キック』」(後書き)

後書きに変えまして・・・

次話予告

迷い込んだのはゲームの世界？

勇者になって世界を救え！

次回、FILE 5 Puzzle Land

FILE 5 - 1 「よっしゃああああ！行くぜ！」

秋、校内の雰囲気が一気に変わった。

その理由は学園祭。生徒達のもつとも楽しみにしている行事。

そして、よく晴れた日の朝。

「羽咲学園、学園祭はじめるぜ！」

学園祭スタートです！

FILE 5 Puzzle Land

+ + + + +

「あゝ・・・暇だ」

学園祭一日目。私と会長は生徒会室に居た。

「しょうがないですよ。当番なんだから」

生徒会は学園祭中に起こったトラブル対処のため常に2人は生徒会室に残ることにしている。

午前中の当番は私と会長だ。

のんびりお茶を飲みながら外の喧噪に耳を傾ける。

「・・・早く遊びてー」

目の前の騒ぎに参加できないのはお祭り好きの会長には辛いことだろう。

そんなことを考えながらボーッとしていると

——ガチャ

「・・・今俺にはこの音がファンファーレのように聞こえるぜ」

ドアの開く音がした。どんだけ待ち望んでいたのかがよくわかる発言だ。

「ただいま」 「遅くなりました」

そう言いながら扉さんと翼くんが入ってきた。

「よつしやああああ！行くぜ！」

会長は生徒会室を飛び出しかけて……

「はい、ストップ」

「ぐはぁ！」

扉さんに足払いをかけられ盛大に転んだ。

「痛てえよ！」

「帰りがけに鈴華さんに会ったのよ」

「スルーか」

扉さんは会長に2枚の紙を差し出した。そこには「3 - A P u z z l e L a n d あなたも勇者に！」と書かれている。

「何だ、鈴華のクラスの出し物じゃねえか。それがどうした？」

「これを想に渡して欲しいって言われたのよ。ついでにコレも」
扉さんは手紙を渡す。それを見た会長は……

「……よし。蘭！」

何故か私の名前を呼ぶ。

「はい？」

「ちよつと付き合え！」

何で！？慌てて会長の手にした手紙を見ると

『やつぽー想。どうせ暇してるんならうちのクラスの出し物やってきなよ。まあ難しいから想にはちよつと無理かな。ペアでやる物だからもう一人誰か探してきてね。』 P S 豪華賞品アリ』

……鈴華さん……

『豪華賞品』。この文字、そして喧嘩を売っているような言葉。会長が黙っているハズがない！

「いつてらっしやーい」

「頑張ってください」

二人の声援を受けながら私と会長は会場である体育館に向かった。

3 - A の出し物は体育館の半分を使った巨大な物だった。そこまでやるか！

「入り口は・・・お、あそこか」
大きく『入り口』と書かれた看板の元に向かうと出し物の内容が書かれていた。

設定：この世界を脅かす悪の帝王を倒すために二人一組で勇者になつてゴールを目指す

内容：途中至る所に問題があるので専用の解答用紙に答えを書く。
全問正解者には賞品アリ。

「何か・・・ありきたりな設定というか・・・何というか・・・」

「まあ面白そうだしいいじゃねえか。行くぞ！」

入り口の生徒にチケットを見せ、解答用紙と鉛筆を受け取り・・・

「では全問正解目指して頑張ってください」

そんな言葉を背にゲートをくぐった。

+ + + + +

すこし薄暗い段ボールの壁で仕切られた道を歩いていると大きな立て札を見つけた。

「これが問題つてやつか？」

「そうみたいですわね・・・えっと・・・」

休憩のために村に入ろうとしたあなたの前に分かれ道があらわれまして！どちらかが『妖精の村』行き でどちらかが『魔物の村』行きです。それぞれの分かれ道にいる門番に、YES/NOで答えられる質問を 一度だけすることができます。門番はいつも本当のことを言う妖精か、いつもウソを言う魔物のどちら かなのですが、どちらなのかは見分けが付きません。どんな質問をすれば『妖精の村』行きの道を知ることが出来ますか。

・・・と書かれている。問題ってロジックパズルの事なのか・・・。

「私こういうの苦手なんですけど・・・。」

そう言いつつ、会長の方を向いてみると・・・。

「よし、できた。次行くぞ」

既に解答用紙に答えを書き込んでいた。早い！

「ちよつと待ってください！答えは？」

「簡単だ。【あの門番に『この道は妖精の村行きですか？』と尋ねると何と答えますか？』と聞けばいい」

あっさりと言われた。

「何でわかつたんですか！会長のくせに！」

「どういう意味だ。少し考えればわかることだろう。じゃあ妖精にこの質問をすればどうなる？」

妖精は・・・魔物がウソについて【Yes】と答えることを知っているから・・・。

「正直に【Yes】って言いますね」

「じゃあ魔物の場合は？」

魔物は嘘つきで・・・妖精が【Yes】と答えることを知っているから・・・。

「嘘について【No】って言います・・・あ」

「わかったか」

そうか！二つの答えを合わせるとどちらが『妖精の村』行きかわかる。

「よし。次だ！」

+ + + + +

少し明るくなった道を進むと絵の描いてある壁を見つけた。

絵に近づいてみると川が描かれていてその上に猫とネズミと勇者と

チーズの描いてある磁石が貼られていた。

「また問題があるぜ」

旅の途中、川で猫とネズミに出会ったあなた。彼らは川を渡るためのボートを持っておりあなたもそのボートに乗せてもらうことになった。しかしここで問題が！

このボート、勇者の他には動物一頭かチーズ一個しか乗せられない。勇者がいなければ猫はネズミを襲うし、ネズミはチーズを食べてしまう。すべてを無事に対岸に渡すには最短何回で出来ますか？

「コレって有名な川渡りパズルってやつですよ。やったことがあります。」

でもこの問題難しいんだよな……。そう思いとりあえず考えてみる。

——カリカリ

鉛筆の動く音がする。隣を見ると

「できた」

会長が解答用紙に向かっていた。

「また早いんですね！なんでわかったんですか！」

「基本中の基本の問題だろうがコレ。こんなものもわからないのか？」

「……うわあ。イラッときた。」

会長は磁石を手に取り、

「じゃあよくわかる解説をしてやろうじゃないか」

川の絵に向かった。

FILE 5 - 2 「便利なシステムだなー」 (前書き)

1の続きです。いきなり解答編なので気をつけてください。

FILE 5 - 2 「便利なシステムだな」

会長はまず『自分』と『ネズミ』の描いてある磁石を取ると

「はい、これで一回」

その磁石を反対側の岸に貼った。

そして私の方を向く。

「・・・どうしたんですか？」

「このあと、どうする？」

解説してくれるんじゃないかなかったのか！？

「甘い。そう簡単にいくか」

仕方がないので私は絵に近づいて『自分』磁石を取って

「こうしますね」

始めに貼ってあった方の岸に貼り付けた。

「まあ、そうだよな。じゃあこれで二回だ」

その後会長は黙々と手を動かし、

猫を連れて渡る

ネズミを連れて戻る

チーズを持って渡る

戻る

という動作をした。そして再び私の方を向く。

「もうわかるよな」

「はい。最後はネズミを連れて渡ればいいから・・・七回でできましたね」

「よし。次に行くぜ」

+ + + + +

その後、幾つか似たようなパズルがあり会長はそれらをドンドン埋めていった。

そして残りの枠は一つ……。

「おゝ最後の問題はっけーん！」

その立て札は今までの物と違い……やたら装飾のある豪華な物だった。

遂に魔王の城にたどり着いたあなたの前に女神からの贈り物が現れた！

3個の箱A、B、Cがあり、そのうちの1個に魔王を倒す為の剣が入っている。箱にはそれぞれ次のようなメッセージが書かれている。
A「剣はこの箱に入っている。」

B「Aの箱には剣は入っていない。」

C「剣はこの箱には入っていない。」

このうち正しいのは1つだけだとすると、剣はどの箱にある？

だそうだ。

「女神が助けてくれるんか。便利なシステムだなー」

そこか。

「それよりも問題考えましようよ」

「んー……」

会長はじーっと問題を見ている。今度はそう簡単にはいかないようだ。

私もやってみよう。

Aに入っているとすると……AとCが正しいことを言っている。

BだとBとCが正しくて……

隣の会長は身動きもしない……寝てる？

そう思い目の前で手を振ってみる。

「おーいかいちょー？」

「……寝てないからな」

バレてたか。

気を取り直して、Cに入っていると・・・Bが正しい・・・あれ？
Cの時だけ一つしか・・・というかこれが答えか。

「Cが答えだー！」

・・・。

「あれ？」

自分以外の声が聞こえて隣を見ると・・・会長も同じように私の方を見ていた。

「かぶったな」「かぶりましたね」

・・・ここまでかぶると逆に恐ろしくなる。

「・・・とりあえず解決したしさっさと行くぞ」

会長は先に行ってしまった。

+ + + + +

また少し歩くと広い空間に出た。正面には係であろう生徒が立っている。

「答え合わせみたいですな」

案の定生徒は解答用紙を渡すよう言ってきたので素直に渡す。
赤ペンの動く音だけが響く。

「終わりましたー」

解答用紙を返されて最初の入り口まで帰ってきた。

結果は・・・

「おー全問正解じゃん！豪華賞品だぜ！」

会長が叫んでいるところに一人の女生徒がやって来て・・・

——カシャッ

「え」

まばゆい光・・・要するにカメラのフラッシュを残していった。

「・・・写真ですか」

「そう、大当たり」

聞き覚えのある声、後ろを振り向くと・・・

「鈴華さん！」

「何やってんだお前」

「ほい、コレ」

鈴華さんは会長に何かを手渡す。

「コレ・・・さっきの写真ですか？」

ポラロイドカメラで撮られたであろう写真。下の方に「全問正解おめでとう！」と描かれている。

「まさか・・・」

「そうそのまさか。豪華賞品だよ！意外と高いんだから」

え・・・心配して会長を見ると・・・

「・・・」

すごく無言だった。なんか呆然としている。

「やー引つかかってくれてよかった！会長が来たとなるとお客が増えるからねー」

「宣伝のためですか！」

「しかも全問正解だよ！もう一枚撮らせて！入り口に貼るから」

その後、会長は一日立ち直らなかった。

「想、どうしたの？何があったの」

「会長が珍しいですね」

「うまい話には裏がある、という教訓を体感してきたようです」

「「は？」」

例の写真は生徒会室に貼られている・・・。

FILE 5 E N D

FILE 5 - 2 「便利なシステムだなー」 (後書き)

後書きに変えまして・・・

次話予告

学園祭なのに・・・

全力で駆け抜ける！

さあ今年の優勝は！

次回、Interval 風の如く (仮

Interval 風の如く!

秋の風がグラウンドを吹き抜けていく。

「いちについてー」

私はテントの中から一人の姿をただ一心に見つめている。

「よいい」

グラウンドが静まり・・・

——パン!

乾いた音と共に選手は走り出す。

Interval 風の如く

+ + + + +

学園祭二日目。今日は恒例の体育祭の日だ。私は役員として本部のテントで座っていた。

「にしても会長すごいですね。圧倒的勝利でしたよ」

「だろだろ。もつと我を褒め称えよ!」

「・・・前言撤回で」

会長は赤いハチマキをとって水分を取っている。

羽咲学園の体育祭は全クラスが4つに分けられ得点を競う形式だ。

私は会長と同じ赤組だ。

「さーて・・・次は・・・騎馬戦か・・・」

グラウンドには選手が入場してきている。

「騎馬戦って格好いいですよ。ちよつと怖いけど」

「ああ、この学校は女子が出場するんだったよ・・・な・・・」

語尾が消えかけている。どうしたんだ?

「会長?」

尋ねると会長はギシギシと音を立てそうな動きである一点を指さし

た。

「一体なに・・・が・・・!?」

指の先を見ると・・・

他の選手とは違う銀の刺繍の入ったハチマキ・・・確か大将用だったような。

それを着けている人物は・・・

「扉あ!？」

会長は口をあんぐり開けていた。私もきつと同じような顔をしているのだろう。

「ななな何で扉さんが!？」

「俺が聞きてえよ!」

そうこうしているうちに試合開始の号砲が鳴り響いた。

+ + + + +

「ふっ・・・疲れたわ」

黄色のハチマキをした扉さんがテントに帰ってきた。

「お、お疲れ様です・・・」

試合は圧倒的だった。

扉さんは何かを耳元で囁き、次々とハチマキを奪っていった。

「お前、何やったんだ・・・？」

「あら、知りたい?教えてあげても良いけど・・・」

会長の質問に微笑んで答える・・・怖い。

「やめとく・・・」

「あらそう」

会長は私を引きずってテントの外に出た。

「そういえば俺、騎馬戦の練習してるとこ見たことあるわ」

「忘れてたんですか・・・で？」

「そのあと女子の会話を聞いたら【呪い】とか【霊】とかオカルトな単語が扉の名と共に・・・」

「……この話はやめましょう」

汗をかいた後だというのに背中が寒くなるのは何故だろう。

「騎馬戦……怖ええ」

同感だ。やりたくない。

+ + + + +

途中休憩を挟んで続いている競技は……

「借り物競走……私行つてきます」

「お、しつかりな」

味方チームの会長の声援を受け私はスタート地点に向かった。

——パン！

競技が始まり、私はとりあえず走って物の書かれた紙をゲットした。開いてみる。

「……な……」

言葉が続かない。これって……！？

「ん？どうしたのー蘭ちゃん」

マイクを持った鈴華さんが近づいてきた。マズイ。

この学校の借り物競走は取りに行く物を実況係に見せないとイケないルールになっている。

「何々……【あなたの好きな人を連れてきてください】」

「何でこんなのが入ってるんですか！」

『ということで我らが書記、藤森蘭ちゃんの借り物は【好きな人】だそうです！』

どうする私！

？棄権する……いやいや。クラスの人に殴られる。

？本当に連れてくる……いやいや。色々……というかいない……かな？

？女の子連れてくる……誤解まねきそうだけど……一番マシ？
思わず周りを見渡すと……会長が手招きしているのが見えた。大

きく口も動いている。

何々・・・？「こつち来い？」

取りあえず向かってみることにした。

テントにはいつの間にか青のハチマキをした翼君が戻って来ていた。会長はイスに座っている。

「何ですか会長？」

「俺が一つ助言してやろう」

会長はスツと手を出し、

「俺を連れて行け」

自分を差した。

「「「はあ？」」」

私だけでは無い。その場にいた全員が声を揃えてこう言った。

「「「話、聞いてた？」」」

「聞いてたわっ！だから言ったんだよ！」

「でも、会長を連れて行ったらとても誤解を招きそうな気が・・・」

間違っても会長は・・・違う・・・と思う・・・。

「お前、俺が好きか？」

「は！？・・・人としては嫌いじゃないですけど・・・人としては

ですよ！」

「わかった。それで良い」

そう言っていると会長は耳元で囁いた。

「・・・。。」

「・・・わかったか！」

「・・・なんと無茶苦茶な。そう思ったけど確かにその通りだ。

「わかりました。行きますよ！」

会長の手を取ると私はテントを飛び出した。

「・・・何があっただんでしょうね」

「ホントよね・・・」

+ + + + +

『おおっと！赤組、藤森選手が連れてきた人はなんと生徒会長だ！』

——ザワッ

「え！マジ？」「やっぱりそうか」「嘘っ」
全校の視線を感じる。

「会長・・・とても居心地が悪いです・・・」

「そうか？じゃ、もっと速く走るか」

そう言々と会長は、

「俺のミラクルダッシュについて来いよ！」

叫んで私を引っ張って走り出した。早い！私の速度の5倍はある。

「ちよっ！会長、無理無理！」

私の足はもつれて転びそうだ。思わず立ち止まると、

「しょーがねーな・・・ホイっと」

「きゃっ！」

会長は私を担いで走りだした。しかも早い。

『さすが3年連続短距離走無敗伝説を誇る生徒会長！その足の速さに風に如く！』

「恥ずかしい・・・何か穴があつたら入りたい」

一気にゴールラインを越え、赤組は一位になった。

+ + + + +

『やー、お疲れ様でした。見事一位、おめでとー！』

マイクを持った鈴華さんが近づいてくる。優勝者のインタビューだそうだ。

「ありがとうございます・・・」

『で』

来た！

『生徒会長を連れてきた真意は・・・』
予想通りの展開だ。私は会長の言葉を思い出す。

——先輩として好きだ、って言えばいいだろ。別に恋愛について聞かれてる訳じゃないし。

ということだ

「先輩として好きですよ・・・まあ多少バカですけど」

「バカとは何だ！俺のお陰で優勝できたんだぞ」

『・・・いや・・・一本取られたね。まあそれでもいつか』

全校の雰囲気心がなしかがっかりしたが・・・まあ気にしないでおこう。

+ + + + +

次の競技が始まる。私は会長に聞いてみた。

「でも、今回の借り物って別に会長じゃなかったって良かったですよ
ね」

「・・・まあな」

「どうして自分から言ったんですか？面倒くさい事になるのわかったはずなのに・・・」

「・・・それは・・・お・・・」

——ゴオオオオ

一際強い風が吹く。会長が何かを言ったが聞こえなかった。

「え？何ですか？」

「・・・何でもない。っーか聞くな、そこら辺は」

「えゝ！いいじゃん。ていうか会長真っ赤ですよ？大丈夫ですか？」

「暑いだけだ！気にするな」

会長は走って行ってしまった。

「いつにも増して変だな・・・あ」

お礼を言つのを忘れた。とりあえず心の中で言っておこう。
(ありがとう)

「・・・ホント鈍いな。お前」
想が走りながら呟いた言葉は当然ながら蘭には聞こえない。

I n t e r v a l E N D

Interval 風の如く！（後書き）

次話予告

騒音

羊

そして生徒会

次回、FILE 6 正義の味方ラブファイター？（仮

秋の話は長くなりそうです。。。実際Intervalが春・夏に
比べ長くなってます。

次回も長くなりそうですがどうぞお付き合い下さい。

FILE 6 「何故リアット!？」 (前書き)

解りづらい挿絵が表示されます。ご注意ください。

FILE 6 「何故リアット!？」

『おおロミオ!あなたはどうしてロミオなの』

『おおジュリエット!・・・』

第二校舎、音楽室では1年生のクラスがロミオとジュリエットの劇をしている。とても有名なシーンだ。

私はそれを端の方で見ている・・・といっても仕事だからあまり気は抜けない。

観客も舞台に引き込まれ、場の雰囲気は最高だ。

その時

——ズギヤアアアン!

静かな雰囲気を取り裂くエレキギターの音がした。

FILE 6 正義の味方ラブファイター?

+ + + + +

現在学園祭三日目。実は一日目から生徒会を困らせる頭の痛い事件が発生していた。

「ターゲットは音楽室に出現!現在東に向かって逃走中!」

私は走りながら無線機に向かって叫んだ。

『了解よ!』

扉さんの返答が返ってきた。

秘密機関——SOUP & SHEEP。私達が今追っているグループの名前である。

彼らは舞台や模擬店に現れてエレキギターを突然鳴らし、学園祭を妨害するのを目的としたグループだ。

とても面倒くさいが放っておくわけにもいかなないのでこうして生徒会が奔走しているのだった。

『すまん！取り逃がした！』

無線から会長の声が聞こえてくる。

「相変わらず逃げ足が速いですね・・・」

『そうだな・・・よし、一旦生徒会室に集合だ』

+ + + + +

私が生徒会室に戻ると既に他のメンバーは集合していた。

「さて・・・そろそろ対策を立てないとですね」

翼君は校内の略図を取り出して言った。

略図には今まで S O U P & a m p ; S H E E P が現れた場所と順番が書き込まれている。

> i 2 2 5 8 0 — 3 0 2 6 <

「学園の西側に多く出没してるわね・・・何か意図があるのかしら」

「おい、【7】と【9】は何だ？校舎内じゃないようだが・・・」
会長が翼君に向かって質問した。

「【7】は3-Cの屋台ですね。騒音に驚いて焼いていた店員が生地を落とし若干の被害が出ています」

翼君は淡々と説明を続ける。

「【9】は正門前ですね。歓迎ゲート付近でギターを鳴らしたため近所から苦情が来ています」

「校内だけにしてくれよ・・・」

さぞかし五月蠅かったことであろう。

「ちなみに【2】と【4】は特に何も無い場所だわ。ベンチで休憩していた人がいたけど・・・」

扉さんが補足をしてくれた。

「何にせよ次に現れる場所を推測して、先回りする必要がありますね」

「なあ・・・」

会長が右手を挙げてこちらを向いている。

「はい、何ですか？」

会長は真顔で言った。

「羊のスープはうまいのか？」

「・・・・・・は？」

「何の話ですか！一体！」

関係ないだろ！

「いや、あいつらの名前って【SOUP&SHEEP】だったからさ」

「そういえばそうですね・・・『スープと羊』ですか
意味不明な名前だなあ・・・」

「動機もわからないわ」

「あれだよ・・・目立ちたいんだよ学園祭で。『自分たちの名を世に知らしめるぜ！』的な」

会長は遠くを見て「うんうん」とうなずいた。気持ちは解る、といったところだろうか。

「名を知らしめる・・・？」

翼君が突然言った。

「どうしたの？」

心配になって近寄ってみると、

「わかりましたー！」

翼君はスゴイ勢いで私の手を掴んで叫んだ！

「わっ・・・何が!？」

「次に現れる場所ですよ」

「おお・・・とりあえず落ち着け翼。大きく深呼吸だ」

翼君はハッと気がついて真っ赤になって私の手を放した。

「すみません蘭先輩・・・では話させていただきます」

翼君は黒いペンを持ってきて略地図の上に置いた。

「まず彼らの目的は会長の言ったとおり『名をあげたい』にあります。なので目立つ行動をし、僕らの目にとまるようにした」

「ま、嫌でも目にとまるわな」

翼君は略地図を縦向きにし、ペンを持った。

「彼らの現れた場所を二つずつ順番に繋いでいきます・・・と」
翼君は私達に地図を見せる。

> i 2 2 5 8 1 — 3 0 2 6 <

「これは・・・!」

それを見て思わず息を呑んだ!

地図上に現れたのは「羊」の文字!

「よって彼らが次に現れるのは【12】! 体育館の前です!」

「そうと決まれば先回りしましょう」

扉さんが宣言して私と翼君はその後に続くこととするが・・・

「まで。普通にやったんじゃ面白くない」

「「「は!?!」」」

会長が静かに言った。

「【S O U P & a m p ; S H E E P】の満足いくように派手にやってやるっじゃねえか!」

会長が私達を集めて小声で提案する。

「・・・マジですか。」

「それ・・・本当にやるの・・・?」

扉さんのつぶやきはもっともだと感じた。

+ + + + +

午後、私は体育館の陰に身を潜めていた。謎の仮面をつけて。
「・・・はあ」

思わず溜息をついてしまう。会長の提案はかなり滅茶苦茶だった。

『そろそろですけど・・・大丈夫ですか?』

無線機から翼君の声が聞こえる。

「気が重いけど・・・しつかりやるよ」

『頑張ってください・・・ターゲット体育館前に近づいてきます』
「いよいよだ！私は息を整え準備をする。」

『体育館前到着・・・5秒後に出てください』

私はカウントを始めた。5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・。

「見つけたぞ！悪の秘密組織【S O U P & a m p ; S H E E P】！」

「あなた達の悪事は私達が許さない！」

「うわああああ！恥ずかしいiiiiiiii！」

会長の計画はこうだ。

『戦隊モノっぽく解決しようぜ。ヒーローは俺と蘭だ』

「何で私ー！ー！一人でいいじゃん！」

会長はノリノリで決めぜりふを言った。

「熱く燃えるぜ！ラブレッド！」

「うう・・・こうなったらヤケだ！」

「明るく輝く！ラブホワイト！」

「「学園戦隊ラブファイター！」」

エレキギターを構えた【S O U P & a m p ; S H E E P】のメンバーは動かない・・・というかポカーンとしている。

「レッドパンチ！」

ポスッ

会長・・・否レッドがゆるーくパンチを決める・・・と見せかけてメンバーの手首をしつかり掴む。

「ホワイトラリアット！」

「何故ラリアット！？」

メンバーのツツコミがはいったがそこはスルーしておく。

私はラリアットと見せかけて会長同様手首を掴む。

「悪の組織は倒した！」

「いや倒してねーし！」

騒ぎを聞きつけて集まってきた生徒達からもツッコミがはいるが会長はスルーする。

「地球の平和は守られた！」

そう言い残し私と会長はメンバーを引きずってその場から走り去った。

「何だったんだ・・・」

生徒達のつぶやきだけが残された。

+ + + + +

その後の取り調べによると【SOUP & amp; SHEEP】はやはり目立つことをしたいだけのようだった。

教師と生徒会・・・主に扉さんの嚴重注意だけで彼らは解放された。

「一件落着ですね」

「そうだね・・・疲れた」

一応仮面は着けていたが「こんなアホやらかすのは生徒会以外にない」という事でラブファイターの正体は私と会長とばれている。

「しばらく外に出れない・・・」

私がちよつと落ち込んでいると、

「いいじゃねーか。楽しかったし」

会長が満面の笑みを浮かべていた。

それを見ると・・・

まあいいか・・・こういうのも。

なぜかそう思えてきてしまった。

FILE 6 END

FILE 6 「何故リアット!？」 (後書き)

後書きに変えまして

次話予告

一週間後に控えた聖なる夜・・・

アノ人の欲しい物は・・・?

次回、FILE 7 HAPPY Birthday! (仮

言ったほど長くなかなか秋編でした・・・。
もう少して終わりだな〜とか色々考える今日この頃です。

FILE7「明日は槍でも降るのか!？」

街に溢れる音楽。

至る所で見られるクリスマスカラー。

そして聖夜はあの人の・・・

FILE7 HAPPY BIRTHDAY!

+ + + + +

12月。テストも終わり世の中はクリスマスや年末に向けて忙しい。

そんな中私は扉さんに呼ばれてファストフード店に来ていた。

「で、今日は何で俺たちを呼んだんですか？」

同様に呼ばれた翼君も理由を知らないようだ。

「さて、問題です。12月25日は何の日でしょう？」

扉さんは突然質問した。

「え〜と・・・クリスマスですね」

とりあえず一番最初に出てきたモノをあげてみる。

「まあ・・・そうなんだけど・・・。誕生日よ。誰かの」

「・・・ああ！会長ですね」

そういえばそうだった。会長は12月25日生まれだった。

去年「クリスマスプレゼントと誕生日プレゼントが一緒に損した気分だ」と言っていた。

「でもそれがどうしたんですか？」

「実は、想に何か生徒会でプレゼントをあげたいって思ってるの」

「はあ・・・」

「でも、何が欲しいのか解らないから・・・このメンバーで調査をしようと思って」

「調査？」

具体的には、会長の行動や発言を見て欲しいものを推測したり、遠回しに聞いてみたりすることを調査と呼ぶらしい。

「どう？やってみない？」

「いいですね。やってみましょう」

私も別に異存は無い。

そして【会長にプレゼントをあげようぜ】作戦が決行された。

+ + + + +

クリスマスまであと一週間。調査が開始された。

作戦？ 遠回しに聞いてみる

これは私と翼君によって決行された。

「会長」

「ん？なんだ。蘭？」

「もうすぐクリスマスですよ」

「そうだが・・・それがどうした？」

ここで翼君にバトンタッチ。

「もしサンタさんが一つプレゼントをくれるとしたら何が欲しいですか？」

「はぁ・・・？翼がそんなこと言うなんて・・・明日は槍でも降るのか！？」

なかなか失礼なセリフである。

「それはいいですから答えてください！」

「ん・・・そうだな。【サンタは何人くらいいるのか】質問する・・・」

「プレゼントじゃないですから！それ！」

「でもそれが一番気になるんだよね」

会長はそう言ってサンタについて語り出した。

「作戦？・・・失敗ですね」

翼君がポツリと言った。

+ + + + +

クリスマスまであと五日。

作戦？ 会長を観察する

これは全員で行われた。

と、言っても・・・。

普段から何を考えているか解らない人だからなあ。

案の定会長の行動からは何も解らなかった。

「全然ダメね。そうだ・・・情報屋を呼んでみるわ」

始めに集まったファストフード店で会議をしている最中、扉さんは
そう言つて電話をかけた。

「情報屋つて・・・あの人？」

「しかないでしょう」

そして10分後。

「やつほー！二ノ宮鈴華の登場だよー！」

鈴華さんがやってきた。

会長の幼なじみの鈴華さんなら何かわかるかもしれない。

呼んだ理由とこれまでの流れを説明したところ、鈴華さんは、

「ん・・・」

とうなつて黙ってしまった。

「どうしたんですか？」

「想はねえ・・・【欲しい】ってことを言わない人なんだよ」

・・・？どうということ？

「想の家は両親が厳しくて、幼い頃から想は厳しい教育を受けていたの」

あの会長が！？

意外な事実すぎる・・・！

鈴華さんは話を続ける。

「そんなせいか想は両親に逆らえない、何かを【欲しい】なんて言えなかったみたい」

子供にとって両親は絶対的な存在。

親が「ダメ」といえば子供はどうすることもできない。

会長はそんな環境で生きてきたから。

【欲しい】なんて言ったら怒られる。

そう考えてきたから。

「まあ・・・今のアイツからは想像もつかないけどね」

「じゃあ、想は自分からは欲しいと言わないってことね」

「そういうこと」

これは困った。

会長が欲しいモノってなんだろう？

「こうなると俺たちで何か考えて贈るしかないですね」

「そうねえ・・・」

会長が一番欲しているモノ。

それは・・・

「あ！」

「どうしたの？蘭ちゃん？」

良いことを思いついた。

私がその案を話すと、

「いいわね」「いいですね」「いいねー」

三人も乗ってくれた。

+ + + + +

あわただしく日は過ぎ、クリスマス当日。

「準備できたー！」

生徒会室には会長以外の全員と鈴華さんの姿があった。

「それじゃあ想を呼ぶね」

鈴華さんが携帯で会長に電話をかける。

『やつほー想。ちよつと生徒会室きてよー』

・・・

『じゃ、よろしく』

——ピッ

会話は終了したようだ。

暫くして・・・

「おゝ何だ何だ。一体」

ドアが勢いよく開いて会長がやってきた。

「何だ。全員いるじゃねえか。何やってんだ？」

翼君が前に進み出る。

「会長・・・」

「お？」

そして・・・

——パン！

「おわっ！」

クラツカーの紐を引いた。

乾いた音と共に色とりどりの紙吹雪が舞う。

「」「」「誕生日おめでとう！」「」「」

「は・・・？」

会長はポカーンと口を開けていた。いつも隙を見せない・・・というか何を考えているか解らない会長にしては珍しい顔だ。

扉さんが大皿を会長に渡す。

「開けてみてください」

「・・・！！」

そこにあつたのは。

チョコクリームで彩られたブッシュドノエル。

「これは・・・？」

「誕生日プレゼントよ。ちなみに翼君指揮のもとで作った手作り」

翼君はお菓子にも詳しいらしく、自ら指揮を執って私達にケーキ作りを教えてくれた。

「私達の気持ちです。おいしく食べてくださいよ」

会長はジーツとケーキを見つめた後・・・

「・・・ありがとう」

少し照れて言った。

+ + + + +

クリスマスの穏やかな時間。

その時は。

誰も「あんな」事件が起きるなんて
予想もしていなかった。

FILE 7 END

FILE7「明日は槍でも降るのか!？」（後書き）

後書きに変えまして

次話予告

受験生だけど・・・

いや、余裕だから

うゝわゝ

次回、Interval 末吉を引いたときの反応について

タイトルで何をするかわかると思いますw

もうすぐ終わりだなゝ。

【嵐の前の静けさ】的な何かを楽しんでいただければと・・・。

Interval 末吉を引いた時の反応について

1月2日。要するに正月。

私の周りには生徒会メンバーがいる。

現在地、神社。

もうおわかりだろう。

私達は初詣に来ている。

Interval 末吉を引いた時の反応について

+ + + + +

——パンパン

鈴を鳴らして手を叩く。

とりあえず願っておくのは【平穏無事】だろうか……。
とか色々考えて無事願い事終了。

ふと気になって尋ねてみた。

「会長は何お願いしたんですか？」

「ん？俺か？」

隣を歩いていた会長は満面の笑みで、

「世界平和」

「嘘だ！ありえない！」

思わず叫んでしまった。

「どういう意味どころ」

「確かに想が【世界平和】とかありえないわね」

扉さんも同意してくれた。

「ブルータスじゃなくて扉……お前もか」

こんなところで偉人の名言を使うな。

「だいたい、なんでありえないんだよ！【世界平和】」

「日頃の行いが悪すぎなんですよ」

先を歩いていた翼君がサラリと言った。

「お前！」

「ちなみに扉さんは？」

話を振ってみた。

「私？私は」

「世界」

「何だそれは！」

何で！？何で世界一なんだ！

「というかお二人とも受験生なのにいいんですか？【合格】とかじやなくて」

翼君に言われて思い出した。会長と扉さんは受験生だった。

「おお。そうだった」

「自分で忘れるな」

そして二人揃って言った。

「「だって余裕だし」」

・・・。

「二人とも今この瞬間世の受験生を敵に回しましたよ！」
うゝわ・・・。

なんともイラッとする発言だ。

確かに二人とも成績は良いようだが。

しばらく悶々として歩いていると。

「おっ！おみくじだぜ！」

そう言って会長が急に駆け出した。

「ふう。仕方ないわね。追うわよ」

+ + + + +

私達が追いつくと会長は既におみくじを引いていた。

「せっかくだから俺達もやりませんか？」

翼君が提案した。

「そうだね。せっかくだし」

お金を払っておみくじを引いて、巫女さんから紙を受け取る。

「俺、大吉でした」

翼君が少し嬉しそうな声で言う。

「私は・・・中吉ね。まあ妥当なところかしら」

扉さんも満足そうだ。

「蘭先輩は？」

言われておみくじを開く。

「・・・・・・・・」

「どうしたって末吉か。また微妙なところを・・・」

これは・・・。

「凶で無かったことを喜ぶべきなのか、中吉とかじゃなかったことを嘆くべきなのか・・・反応に困ります」

微妙すぎる・・・！

「あゝわかるぜ。末吉を引いた時の反応については永遠の課題だよな」

「どんな課題よ。それ」

扉さんにツツコミを入れられてしまった。結構マジな話なんだけど。

「気を取り直して、会長はどうでしたか？」

場をとりなすかのように翼君が聞く。

「ん・・・・・・・・っ!？」

ウキウキと紙を開いていた会長が石化した。

「どうしたんですか・・・ってまさか」

恐る恐る紙を覗いてみる。
目に入ってきたのは、

凶

「あゝ」「これは」

同じように紙を覗いていた扉さんと翼君も思わず声をあげる。

「・・・でもおみくじでわかる神の意志は細かいところにありますし」

翼君がフォローを入れるが・・・。

「どういうこと？」

「例えば和歌が書いてあるじゃないですか。それとか意外と良いことが書いてありますよ」

どれどれ・・・。

「・・・」

「蘭先輩？」

これはっ・・・。

「さっぱり意味がわからない！」

「訳を見ればいいじゃないですか！」

あ、本当だ。横に小さく訳が書いてあった。

「えゝと・・・ざっくり言えば【大きな壁にぶつかる】的な感じでしょうか」

翼君が本当にざっくり言ってくれた。

「良いことか！？コレは良いことなのか！？」

会長は相変わらず叫んでいる。

何か場の收拾がつかなくなってきた・・・。

「まあまあ。混んできたし、早いトコ帰りましょう」

扉さんが会長を引きずって歩き出した。

+ + + + +

比較的広い道に出た。

「俺の運勢・・・」

会長はまだ落ち込んでいる。

「しっかりしてくださいよ。逃げないモノも逃げてきますよ」

ざっくり言って落ち込ませた超本人・・・翼君が言った。

私はそれを見て笑いながら歩いていた。

その時。

——ドンッ

人にぶつかってしまった。

「す、すみません！」

慌てて頭を下げると。

「寺谷じゃねえか」

そんな声が聞こえた。

会長の方を見る。

「・・・白鳥。お前・・・平山ひらやまに行ったのか」

公立平山高校。

この辺では有名な不良の集まる高校だ。

どうやら会長と中学が一緒だったみたいだ。

「そういう寺谷は羽咲かよ。相変わらずガリ勉なのか」

そう行った声に含まれているのは。

あからさまな侮蔑。

「ちよっ・・・！」

思わず間に入ろうとしたが、会長に止められた。

「そうだよ。羽咲だ。だからどうした」

「・・・言うようになったな。つまらねえ」

そして。

「昔のようなお前の面。もう一度見てみたいぜ」

そう言い残して笑いながら去っていった。

「・・・何なんですか！あいつ！」

「まあまあ。昔からあんなヤツだったから」

思わず叫んだところを会長になだめられる。

その横顔は、

苦しそうな。

悲しそうな。

そんな顔。

思わず息を呑んだ。

だからなのか、一拍後には会長はいつもの表情に戻り。

「さー帰るぞー！」

そう言っでどんどん先に進んでいってしまった。

年の初めから嫌な予感がしてならなかった。

I n t e r v a l E N D

Interval 末吉を引いた時の反応について（後書き）

後書きに変えまして、

最終話予告

生徒会、最大の危機！？

卒業式まであと3日。

「いったい何処にいつちまったんだ！」

次回、LastFILE 失踪

自分でハードルを上げすぎて困っている作者です（笑）
最後ぐらい・・・真面目に終わらしたいじゃねえ・・・。
そんなワケで遂に最終回です。是非ごらんください！

LAST FILE - 1 大変だ (前書き)

歪んだ人が出てくるハズです・・・ (笑)

上げるだけ上げたハードルを一気に低くしておきましたー (オイ

LAST FILE - 1「……大変だ」

時間は流れるように過ぎ、卒業式まであと3日。

その日は朝から雨が降っていた。

「あ、蘭先輩。おはようございます」

蘭が道を歩いていると後ろから黒い傘を差している翼に声をかけられた。

時刻は7:00。まだ早いせいか2人の他に人影は無い。

「おはよう。翼君。あと少しで卒業式だね」

「本当ですね。何かいつもと変わらない気がします」

「確かに。会長も扉さんも毎日のように生徒会室に入り浸ってるから」

校門が見えてきた。

その時――

「っ！」

蘭の口が後ろからふさがれた。

「先輩!？」

「ん!？」

一瞬なんだかわけがわからなかった。

が、すぐに身の危険を感じ蘭は暴れ出した。

蘭は必死に抵抗していたが、腹部を軽く殴られて気絶してしまった。

「先輩を離せ!」

蘭を気絶させた人物の顔は見覚えがある。

正月に道で会ったあの……。

翼はその人物に飛びかかった。

が、

「うつ……」

あっけなく蹴り飛ばされてしまった。

そして、蘭とその人物は姿を消した。

道には蘭の差していた傘と翼だけが残される。
「……大変だ」

Last FILE 失踪

+ + + + +

目が覚めると、見知らぬ場所にいた。

「……ここは……?」

私は……確か後ろから口をふさがれて、抵抗したら殴られて、

その後は……。

「目が覚めたか」

声がした。

私は後ろを振り向く。

すると、

「あなたは……!」

正月に会った会長の元同級生がいた。確か名前は白鳥。

「あなたが私をここに連れてきたの!？」

「ああ。そうだ」

一体何で？

「教えてやろうか。それは」

それは……?

「昔と同じ面を見たいからだよ」

……そういえば。

『昔のようなお前の面。もう一度見てみたいぜ』

そんなことを正月に言っていた。

白鳥は歪んだ笑みを浮かべながら、

「昔と同じ暗くて苦しそうで情けない顔をなあ！」
そう言った。

この人はっ・・・！

「そんなワケで俺に協力して貰うぜ。暴れない限り悪いようにはしねえよ」

白鳥はドアを開けて外に出ていった。

——ガチャリ

鍵のかかる音がした。

とりあえず状況を確認しよう。

私の手足はとりあえず自由だ。

でも、この部屋には猫が通れるくらいの小さな窓と鍵の掛かったドアしかない。

「脱出は無理、か・・・」

制服のポケットを探してみると携帯電話が入っていた。

どうやら白鳥に取られなかったようだ。

電源を入れるとアンテナは3本。一応使える。

とりあえず連絡を入れてみよう。

+ + + + +

蘭が白鳥に攫われた。

珍しく焦った翼からの電話で俺はその事実を知った。

そして今、生徒会室には蘭を除いた生徒会メンバーが全員揃っていた。

「白鳥ってあの平山の生徒よね」

「ああ」

俺の昔と同じ面が見たい——あいつはそう言った。

だから、行動を起こした。

俺のせいだ。

蘭を巻き込んでしまった。

くだらない俺の過去に。

「・・・どこいっちゃまったんだ！あいつは！」

——ダンッ！

思わず机に拳を打ち付ける。

くそっ・・・イライラする。

「まあ、落ち着きなさいな。想」

「・・・そうですね。とりあえずこれからどうするか考えましょう」
両側から打ち付けた拳を押さえてくれる手。

扉と翼だ。

そうだ。

今の俺は孤独じゃない。

あの頃の俺とは違う。

「・・・そうだな」

絶対に蘭を見つけ出そう。

そう誓った矢先。

♪

携帯電話が鳴った。液晶には「藤森蘭」と書いてある。

まさかの蘭からだ。

慌てて電話に出ると、

『あ、繋がった。すみません、ご迷惑おかけして』

いつもとさしてかわらない蘭の声が聞こえた。

「お前っ・・・大丈夫なのか！？」

『まあ・・・外に出られないだけで手足は自由ですし・・・強いて
言うなら暇、ですね』

・・・まったくいつも通りだ。心配して損した。

「で、どこに居るんだ？」

『・・・わかりません。窓も小さいのが一個しかないし・・・部屋
も薄暗くてよく・・・』

「そうか」

『あっ・・・白鳥が来る。また連絡入れます』

そんな言葉を残して電話は一方的に切れた。

「蘭ちゃんは無事みたいね・・・ところで何で電話が使えるの？」

「白鳥が楽しみたいだけだろう。あいつはそういうヤツだ」

「・・・？」

+ + + + +

「誰と電話してたんだ・・・ああ。寺谷か」

バレた・・・！

これはマズイ。下手すると電話を取り上げられる。
だからしらばつくれることにした。

「何のことですかー？ただの独り言ですよー」

「そんなわけあるか・・・よつと」

右手をつかまれ隠していた携帯電話はあっさり見つかった。

「・・・ふーん」

白鳥は私の携帯電話を操作して何かを探している。

「・・・人の勝手に見るなんていい趣味してますね・・・あなた」

「面白そうなもんは無さそうだな・・・ほい」

白鳥はしばらくして電話を私に投げてきた。

てつきりとられるかと思っていたのに。

「このくらいのハンデがなきゃ面白くないだろ」

そう言くと白鳥はまた外に出て行った。

時刻はいつの間にか午後3時。

静かになった部屋で耳をすますと

——ポチャン

「水・・・？」

何かが水に落ちる音だ。続いて話し声。

『やつべー！ケータイ川に落とした！』

『お前・・・アホだな』てことは川の近くなのか。ここは。
早速会長に伝えないと！

ケータイを取り出し発信履歴から電話をかけようとして・・・

「ちよつと貸せ」

「あつ・・・ちよつと!」

横から白鳥に奪われた。白鳥はそのままボタンを押してしばらく沈黙。

+ + + + +

蘭からの電話があつてから早6時間くらい経った。

「学園側に言います?」

翼がもつともなことを言った。

「いや・・・少し待て」

翼の言うとおりになれば事件は早く解決するだろう。

でも、俺はどうしてもゴーサインを出せない。

嫌な予感がする。

く

ケータイが鳴った。

「蘭からだ!」

何かわかったのだろうか。

しかし、聞こえてきたのは、

『よお。寺谷。気分はどうだ?』

今、一番憎い声。

「・・・最悪だ!」

『そうか。その顔をこの目で見れないのが残念だ。さて、本題だ』

白鳥は一度言葉を切り、言った。

『ゲームをしようじゃねえか。お前の大事な後輩の居場所を見つけられたらお前の勝ちだ。逆に制限時間内に見つけられなかったら・・・』

『っ!』

ケータイ越しに聞こえてきたのは刃物が抜かれる音と蘭の息を呑む

音。

『こいつにお前と同じ苦しみを与えようじゃねえか』

「お前っ！」

『おっと。頭の固い大人の手を借りるのはナシだ。まだこの街にいるからそこまで大変じゃないし、興が削がれるからな』

こいつ・・・！

手を借りたら蘭が危ない。

言外にそう言っている。

「自分達で何とかしろってか」

『制限時間は3日後の正午。ケータイは使っても良いぜ。ハンデは必要だろう？・・・人質はもう何かを掴んだようだが。精々頑張ることだな！』

+ + + + +

さすがにナイフを突きつけられた時は怖かった。

目が本気だったから。

しばらく話をした後、白鳥がケータイを返してきた。

まだ通話中になっている。話していい、ということだろう。

「もしもし！少し場所を掴みました！」

『お前・・・大丈夫か！？』

会長の珍しく焦った声が聞こえる。

それを聞いていると、

「ふふっ」

『おい、蘭？』

笑いがこみ上げてきた。

まったく・・・。

「焦ってるなんて会長らしくないですよ。こっちも頑張って手がかり探しますから、会長もしっかりしてください！」

『蘭・・・そうだな。任せろ！絶対に助けてやるからな！』

絶対に、か。頼もしい。

「じゃ早速掴んだ手がかりです。私の居る場所は川の近く。河川敷のある川です」

『川か。わかった。必ず見つけ出す！信じて待ってるよ！』
それだけ残して電話は切れた。

「なかなか度胸のある女だ。ますます面白くなってきた」
振り返ると白鳥が壁にもたれて笑っていた。

「お褒めに預かり光栄です。悪の帝王様」

「どういたしまして。勇敢な囚われの姫」

菓子パンを残して白鳥は部屋を出て行った。

さあ、行動開始だ！

+ + + + +

電話が切れ、俺はすぐに扉と翼に白鳥の言った事を伝えた。
2人は少しの沈黙の後、

「地図・・・あるかしら」

「俺、職員室に行って借りてきます」

動き出した。

「何してんの、想！ぼやっとしてないで考えるわよ！」

本当に頼もしいやつらだ。

どんな状況でも最善を尽くそうとする。

「地図借りてきました！川は・・・」

地図を見ると川は2つある。

【東川】と【西川】。その名のとおり、この街の東側と西側にある。
「どっちだ・・・？」

確かどちらも河川敷はある・・・というか河川敷の無い川を俺は知らない。

「まだ情報が少ないですね・・・蘭先輩を待ちましょう」

「そうね・・・。想、一つ聞いてもいいかしら？」

「何だ？」

「あの白鳥は想にとって何なの？」

意外な質問だった。

まさか扉にされるとは思っていなかった。

だからしばらく考えて、

「敵だ」

とりあえずそう答えておいた。

+ + + + +

寺谷想は中学時代には今では考えられないくらいに暗くて弱い人間だった。

彼はいつも勉強ばかりしていて、クラスに友達もいなかった。

だから、白鳥達のグループに目を付けられた。

ある日は殴られ、またある時は蹴られる。

白鳥達のストレス発散のためだけに暴力を振るわれた。

寺谷想は更に孤独になった。

助けようとした生徒もいたが、白鳥達のグループに目を付けられるのが怖くてできなかった。

彼の表情は悲しみから絶望に変わり、ついには。

『こいつ・・・泣きもわめきもしねえ』

表情が消えた。全ての感情を心の中に閉じ込めて。

+ + + + +

白鳥は突然そう話した。何で私に言ったのかわからない。それを質問すると、

「何となくだ」

そう言われた。

「あいつはすっかり変わっちまって面白くねえ。あの頃みたいに人形のようなあいつを見たいんだ」

白鳥の本心はそういうことだったのか。

にしても・・・。

「最低ですね！あなた」

「最低で結構だよ」

白鳥はまた外へ出て行った。

ドアが開く時、チラッと見えた外の景色は既に夜に変わっていた。
残りあと2日。

L a s t F I L E - 2 「これを食べろ!？」 (前書き)

まだまだ続きます・・・。

Last FILE - 2 「これを食べろ!？」

夜が過ぎ、朝が来た。

床に座ったまま寝てしまっていたらしい。

「どこでも寝れる自分が怖い・・・」

何だろう。生徒会のせいで繊細だった神経が図太くなっている気がする。

「さて、今日もやるわよー!」

何から始めよう。

考えていた時に小さな窓が目に入った。

私の背では手が届かない。

外に出るのは不可能だけど・・・。

「外を見ることがくらいなら・・・」

部屋の片隅にあった古い木のイスを運ぶ。

そこに乗るとちょうど窓の外が見えるようになった。

とりあえず目に入っただのは予想通りに川。

他には・・・。

——カーン!

「あつちいったぞー!」

・・・野球?

金属バットにボールが当たる音だ。

すると街の野球チームのユニフォームを着た男性が走ってきた。

野球のできるグラウンドでもあるのかな?

「・・・何やってんだ」

「わあっ!」

ボーッと外を見ていたら後ろから白鳥に声をかけられた。

「いきなり声をかけないでよ!」

「脱出でもしようとしたのか」

イスから降りて元の場所に戻す。

「出れるわけじゃない。こんな小さな窓で」
「それもそうか」

白鳥はコンビニのおにぎりを木のテーブルの上に置き、
「あと2日・・・せいぜい頑張ることだな」
そう言つてまた外に出て行つた。

+ + + + +

あと2日。

蘭からの連絡はまだない。

「・・・そういえば」

「何だ？」

扉がふと思い立ったように言つた。

「蘭ちゃんのケータイ・・・電池、大丈夫かしら」

「あ」

ケータイだって電池が無ければ使えない。

多分アイツは充電器なんて持ち歩いてないし・・・きつと居る場所に電気は通っていない。

「手がかり以前に連絡手段が無くなっちゃうわね・・・」

「なるべく早く解決しないと・・・」

新たな問題に直面してうなつていた時。

「会長、どうぞ」

翼がコンビニのパンを差し出してくる。

そういえば、昨日からほとんど何も食べていない。

「おう、サンキュー・・・って・・・何だ、これ!」

パンの袋を見ると【激辛!ババネロ・チリペツパー味】と大きく書かれている。

「これを食べると!?!」

「疲れた頭に刺激が行き渡るわよ」

背後から声がしたので振り返って見ると、

「扉・・・大丈夫か・・・？」

既に食べてみたのか、あまりの辛さに涙目になっている扉がいた。しかし、翼は平然と激辛パンを食べている。

「会長、食べないんですか？」

できれば食べたくない。

だが腹は減っている。

——ドン

傍らにペットボトルの水を置き、俺は勢いよくパンを口に放り込んだ！

と、その時。

く

ケータイが鳴った。

通話ボタンを押して、出る。

「ふぁんふぁん！？」

『なに言ってるかわからないです！』

しまった。パンを口に入れたままだった。

とても辛いが、とりあえず飲み込み、

「で、何かわかったか？」

『すごく微妙なことですけど・・・野球をしている音が聞こえます』

野球・・・。

「わかった。また何かわかったら電話してくれ」

通話を終え、すぐに地図に向かう。

「先輩は！？」

「野球の音が聞こえるそうだ」

「野球ね・・・今日は祝日だから草野球かしら」

野球ができるってことはグラウンドがあるわけで・・・！？

「グラウンドだ！グラウンドが近くにある川はどっちだ！？」

「【東川】の方よ！」

「よし！蘭は【東川】のグラウンド付近にいるぞ！」

扉と翼の表情が明るくなった。

だいぶ範囲が狭まった。

「待ってるよ！蘭！」

+ + + + +

報告を終えてから結構経った。

私は大きな問題に直面していた。

「う．．．わ．．．」

穴が開きそうなほど見ているのはケータイの画面の左隅。

電波は良好。

そして、

「電池残り1コおおおおお！？」

思わず叫んでしまった。

充電器は．．．持ち歩いていない。

そもそも電気も通って無さそうだ。

そう思うと、

「確実な情報を．．．」

かなり焦ってきた。

もう無駄な報告はできない。

てつとりばやく見つかる確実性のある情報を．．．。

思わず室内を見回すと、古い木製の棚が目に入った。

「本かな．．．？」

棚の上には平積みになった本が置いてある。

近づいて何気なく一冊めくってみる。

「古．．．．」

表紙がボロボロだったから予想をしていたが、中もかなり古い。

「本じゃないみたいだ．．．時刻表？」

本には時間らしきものとページの上部に、

「【羽咲線・龍の宮駅 所有】．．．？」

羽咲線。

昔この東川のほとりを走っていたローカル線。

もう何十年も前に廃線されたはず。

本棚の横にあるのは、【龍の宮】と書かれた木製の看板。
きつと駅看板。

「ここは駅だったの・・・？」

呟くと、これはかなり重要な情報だと確信できる。

その後、私は夢中で本や看板を調べ、羽咲線について手がかりを得た。

そしてふと気がつけば夜になっていた。

L a s t F I L E . 3 . . . さみしいです」(前書き)

やっと終わります。

Last FILE - 3「・・・さみしいです」

会長に駅のことを連絡したら、ケータイの電池が残り1個になった。

連絡できるのはあと1回つてところだろう。

今まで私が教えた手がかりは、

？川の近く

？野球の音

？廃駅らしい

ということ。

「ちゃんと通じたかな・・・」

よく考えるとこれと言ってわかりやすい手がかりは無い気がする。
でも、

「絶対に見つけてくれる」

あの人達なら。

+ + + + +

蘭の廃駅らしき場所の報告は俺達に重要な手がかりを残した。

「川沿いに線路・・・あ」

何かあったかと考えて、思い出した。

「そういえば昔、【羽咲線】っていうローカル線が走ってたよな。

まあ、俺達が生まれる前には廃線されてたけど」

「それよ！想！」

「よく思い出しましたねえ！で、どこの駅ですか？」

翼に言われ、地図を見る。

「川沿いで、グラウンドが近くにある駅・・・って！」

大事なことを思い出した。

「この地図、最新版だろ！載ってねえよ！」

「「あ」」

図書館には古いのがあるだろうか？

+ + + + +

私はその後、何も手がかりがつかめなかった。
そして。

——ピー、ピー

電池は切れた。

あとは信じる事しかできない。

「ケータイを使い切ったか」

白鳥の声が聞こえたがいつものことなのでもう驚かない。

「ええ。できることはやったわ」

「そうかい。じゃ、俺も準備をするかな」

白鳥は楽しそうな声で笑いながら外へ出て行く。

やる事が無いと色々な事を思い出した。

4月、突然現れた会長に無理矢理生徒会に入らされた。

あの時は私も翼君も何がかかわらなかったっけ。

それから、カップルの手助けをしたり、てるてる坊主を作ったり、

テストでは会長の意外な事実がわかったなあ。

「そうだ、合宿をしよう」で始まった夏合宿。幽霊事件もお宝のこともたいしたことなくてがっかりしたっけ……。ご飯もあまりおいしくなかった……。特に会長。

学園祭は盛り上がったなあ。会長と出し物見に行ったり、運動会したり……。リアットは……。あまり思い出したくない。

冬は会長の誕生日があつて、初詣に行つて……。

……。もうすぐ終わりかあ。

こんな楽しい日々も終わりが近づいている。

会長も扉さんも卒業してしまう。

……。さみしい。

「・・・さみしいです」

「・・・泣くな！」

突然抱き寄せられた。

「・・・私、泣いてますか？」

そう言くと、手が私の頬を乱暴に拭う。

「・・・待たせたな。蘭」

「会長・・・！来てくれたんですね」

「当たり前だろ」

「とてもわかりやすいヒントだったわ」

「無事で良かったです」

「扉さんに翼君も・・・！」

伝わっていた。

そう思うとすごく安心して、

「・・・っ」

私は会長にしがみついて泣いていた。

「あゝだから泣くなつて。どうしたもんか・・・」

「良いじゃない。役得よ」

はっ・・・！

落ち着いたところで冷静な判断力が戻ってきた。

「きゃあああ！すみません、会長！」

私は何ということをし！

恥ずかしすぎる！

慌てて会長から離れたら、

「・・・もつとくつついても良いんだぜ？」

そんなことを言われ。

「からかわないでくださいっ！」

いつものような空気が戻ってくる。

でも、それもつかの間。

「来たか。寺谷」

「要望通り来てやったぜ。白鳥！」

白鳥が室内に現れた。

会長はさりげなく私を翼君の方に押しやる。

心配してくれてるのか。

そうわかったので大人しくしていることにする。

「ちゃんと見つけられたようだな。約束通り、危害は加えなかったぜ」

「当たり前だ！で、お前の目的は達成されたのか」

白鳥は答えない。

代わりにその顔に笑みを浮かべた。

「・・・まだだな。こんなじゃ面白くもなんともねえ！」

——ガンっ！

白鳥は椅子を思い切り蹴った。

衝撃に耐えられなかった椅子は壊れて会長の前に転がる。

「・・・」

会長は無表情にそれを見ていた。

「そんなわけで」

白鳥が動いた。

「わっ・・・！」

「翼！」

翼君の体が横に倒れる。

「弱いな・・・面白くない」

「お前・・・！約束が違うぞ！」

「俺はこの女に手を出さないって言ったただけだ。他の連中に手を出さないとは言つてない」

何ていう人だ・・・！

私は翼に駆け寄り、抱き起こす。

「すみません先輩・・・やっぱり俺って弱いですね・・・」

「翼君・・・」

翼君は弱々しく笑った。

「次は・・・お前か」

白鳥が見た先には。

「！」

扉さんがいた。

白鳥は真っ直ぐ扉さんの方に向かって、

「・・・離しなさい」

腕を掴んだ。

力を入れられているのか、扉さんの表情は苦痛に歪んでいる。

「ちよつとでも力を入れれば折れそうだ」

「・・・！」

扉さんの表情が更に険しくなる。

「やめろ！」

会長が叫んだ。

「こいつらを巻き込むな。セコい手使ってないで、正々堂々と勝負しろ！」

そして白鳥を睨みつける。

その時の会長の表情はいつになく厳しくて、怖い。

「まあ、残念ながらお前の要望は叶えられないがな」

扉さんを私達の方に押しやって、

「俺は今、1人じゃない。こいつらがいる。だからお前には絶対に負けない！」

沈黙。

白鳥は笑った。

「・・・負けたぜ。お前はもうあの時とは違うんだな」

白鳥は吹っ切れたようにひとしきり笑ったあと。

「・・・なあ。何がお前を変えたんだ？」

そつ会長に尋ねた。

会長は満面の笑みで、

「羽咲学園生徒会だよ！」

そつ答えた。

「さっお前ら帰るぞ！卒業式まで時間は無いんだ」

会長はさつさと外に出て行く。

扉さんと翼君もあとに続く。

私はその場に立ったままだった。

「行かないのか？」

「一つだけ言いたいことが」

誘拐されてからずっと思っていたこと。

毎日の食事。

少しだけ掃除された室内。

彼なりの細かな気遣い。

「白鳥さん、ホントは良い人なんですからもっと素直になったほうが良いですよ」

そんなことを言うと、彼は虚をつかれたような顔をしていた。今まで見たことのなかった表情。

見れたことがちよつと嬉しい。

「じゃ、またどこかで」

そう言い残し、私は会長達のあとを追う。

何日かぶりに見た空は青く澄んでいた。

L a s t F I L E E N D

e p i l o g 「羽咲学園によつこそ!」 (前書き)

異例の短さです。。。

e p i l o g 「羽咲学園によっこそ！」

4月。

「よし！行くよ、翼君！」

「気合い入ってますね先輩」

「あたり前でしょ！何たって新生徒会の初仕事だよ！」

私は生徒会長に昇格した。

同様に翼君は副会長に。

今日は入学式。

私は挨拶をしなければならない。

「ちゃんと新入生も見てくださいね」

「わかってるよー！じゃ、行ってくるね」

人前で話す事は苦手。

でも、引き継いだからには精一杯やろう。

『続いて、生徒代表挨拶。生徒会長、藤森蘭さん』

胸を張って、とにかく堂々と。

そう言ってくれたのはあの人。

マイクの前に立ち、少し深呼吸をして。

「羽咲学園によっこそ！」

満面の笑顔で。

E N D

epillog 「羽咲学園によつこそ！」（後書き）

今回は真面目に後書きします。

さて、終わりました。

【生徒会の事件簿・・・？】完結です。

このepillogは異例の短さです。

まさかの200文字前後。

まあ、これはこれでアリかな～と思っています。

これからも色々な話を書いていきたいと思いますので、どうぞよろしく願います！

最後になりましたが、ここまで読んでくださった方に特大の感謝を！
本当にありがとうございました。

2011年 6月 美月天

音（海無七河）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7977p/>

生徒会の事件簿・・・？

2011年6月9日18時36分発行